

1.

定額常費俸給

奏任月給

1.

年月日		摘要	憑書 番記號	借方			貸方			殘		
年	月			圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘
明治	七	四等官壹人	34	250	00	0						
	十七	六等官壹人	34	100	00	0				350	00	0
	八	四等官壹人	105	250	00	0						
	十七	六等官壹人	105	100	00	0				700	00	
	九	四等官壹人	235	250	00	0						
	十七	六等官壹人	235	100	00	0				1050	00	0
	十	甲號仕拂濟証第拾號、内					1050	00	0	0		
	八	四等官壹人	346	250	00	0						
	十七	六等官壹人	346	100	00	0				350	00	0

明治十五年第廿九號達付屬

織 組 簿 記
本 摸

摸本中縦ノ雙單線横ノ並線及ヒ〔〕ヲ付ス
ル字ハ原本總テ朱刷ニシテ表題ノ横並線
モ亦朱ナリ

何 年 度

日 記 簿

廳 名

借方

〔經費金大藏省ヨリ〕

領受ノ件記入ノ例

貸方

借方		〔經費金大藏省ヨリ〕			領受ノ件記入ノ例			貸方		
現金	圓	錢	厘	圓	錢	厘	國庫	圓	錢	厘
諸費元受傳票何號・何號・何號・何號	0						何年度本廳經費第何期分領受 傳票何號	0		
				0			何年度何所興業費——ヶ—— 傳票何號	0		
							何年度神社費——ヶ—— 傳票何號	0		
							何年度何々費——ヶ—— 傳票何號	0		0
							〔諸費仕排ノ〕			
							何年度經費			
何々	0						現金	0		
何々	0						何々			0
							〔諸費〕			
							預算増額許			
							何年度何々費			0
							何々ノ事出ニ依リ何々ニ付増額ノ額何月何日付現金			
							〔諸費〕			
							預算減額			
							何年度何々費			0
							何々ノ事出ニ依リ何々ニ付減額ノ額何月何日付現金			
							〔諸費〕			
							預算減額			
							何年度何々費			0
							何々ノ事出ニ依リ何々ニ付減額ノ額何月何日付現金			

何 年 度

雜 收 入 內 譯 簿

廳 名

〔模本中縦横ノ雙單線及ヒ横ノ雙
線ハ原本朱刷表題ノ雙線亦同シ〕

1.

雜 收 入 金

年月日		摘要	借方			貸方			借或貸	残		
何年	月		日	圓	錢	厘	圓	錢		厘	圓	錢
十	二	森林諸排代外四件收入	800	00	0				借	800	00	0
	五	全上ノ分出納局へ假納ノ分				800	00	0		0		
	十	森林諸排代外四件收入	390	00	0				ク	390	00	0
	十六	森林諸排代外二件出納局へ假納ノ分				330	00	0	ク	60	00	0

假 納

2.

年月日		摘要	借方			貸方			借或貸	残		
何年	月		日	圓	錢	厘	圓	錢		厘	圓	錢
十	五	森林諸排代	200	00	0							
	ク	地所貸下料	300	00	0							
	ク	家屋排下代	200	00	0							
	ク	物品排下代	80	00	0							
	ク	雜收	20	00	0				借	800	00	0
	十五	全上ノ分本納濟								800	00	0
	十六	森林諸排代	100	00	0					0		
	ク	地所貸下料	180	00	0							
	ク	家屋排下代	50	00	0				ク	330	00	0

5. 家屋拂下代										6. 物品拂下代															
年月日		借方			貸方			借或貸	残			年月日	摘要			借方			貸方			借或貸	残		
何年	月	日	圓	錢	厘	圓	錢		厘	圓	錢		厘	何年	月	日	圓	錢	厘	圓	錢		厘	圓	錢
七	-		300	00	0				300	00	0	七	-		150	00	0				150	00	0	借	
十	二					200	00	0	100	00	0	十	二					80	00	0	70	00	0	貸	
十	十					50	00	0	50	00	0	十	十					40	00	0	30	00	0	貸	

收入豫算申牒高
 何區何番地=アル建家拂代何景納
 何區何所=アル小屋拂下代何景納

收入豫算申牒高
 本廳不用物品拂下代
 何所何々拂下代

日 月 年
 何年度雜收入豫算殘高表

勘定科目	借方			勘定科目	貸方		
	進テ收入スヘキ高				進テ納付スヘキ高		
	圓	錢	厘		圓	錢	厘
雜收入金	60	00	0	大藏省	1,000	00	0
假納金	330	00	0				
森林諸拂代	200	00	0				
地所貸下料	320	00	0				
家屋拂下代	50	00	0				
物品拂下代	30	00	0				
雜收	10	00	0				
總高圓	1,000	00	0	總高圓	1,000	00	0

何 年 度
 經 費 內 譯 簿

廳 名

摸本中縦横ノ雙線縦ノ單線及□ヲ付
 スル字ハ原本總テ朱刷表題ノ雙線亦
 同シ

5.

俸 給 屬 官 俸 給

雜 給 旅 費 [(但府縣ハ管内外ヲ分ツ)] 6.

年 月 日	摘 要	借 方			貸 方			借 或 貸	残			年 月 日	摘 要	借 方			貸 方			借 或 貸	残		
		圓	錢	厘	圓	錢	厘		圓	錢	厘			圓	錢	厘	圓	錢	厘		圓	錢	厘
何年 七	像算御達高 何某外何人本月分				5.600	00	0	貸 ク	5.600	00	0	七	像算御達高 何某何所出張何々				3.200	00	0	貸 ク	3.200	00	0
- 十七		500	00	0					5.100	00	0	十		85	00	0					3.115	00	0

9. 應 費 備 品														
年 月 日		摘 要		借 方			貸 方			借或貸	殘			
何年		圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘		圓	錢	厘
七	一				500	00	0				貸	500	00	0
	十五	80	00	0							貸	420	00	0
		豫算御達高 椅子何脚新調代												

10. 應 費 消 耗 品														
年 月 日		摘 要		借 方			貸 方			借或貸	殘			
何年		圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘		圓	錢	厘
七	一							300	00	0				
	五	25	00	0							貸	275	00	0
		2	00	0							貸	273	00	0
		豫算御達高 筆何對買入代 美濃紙何東買入代												

11.

應 費 郵 便 税

年月日	摘要	借方		貸方			借或貸	残		
		圓	錢	圓	錢	厘		圓	錢	厘
何年 七 一 五	豫算御達高 書物何所送リノ分		100 00 0	100 00 0			貸	100 00 0		
								99 00 0		

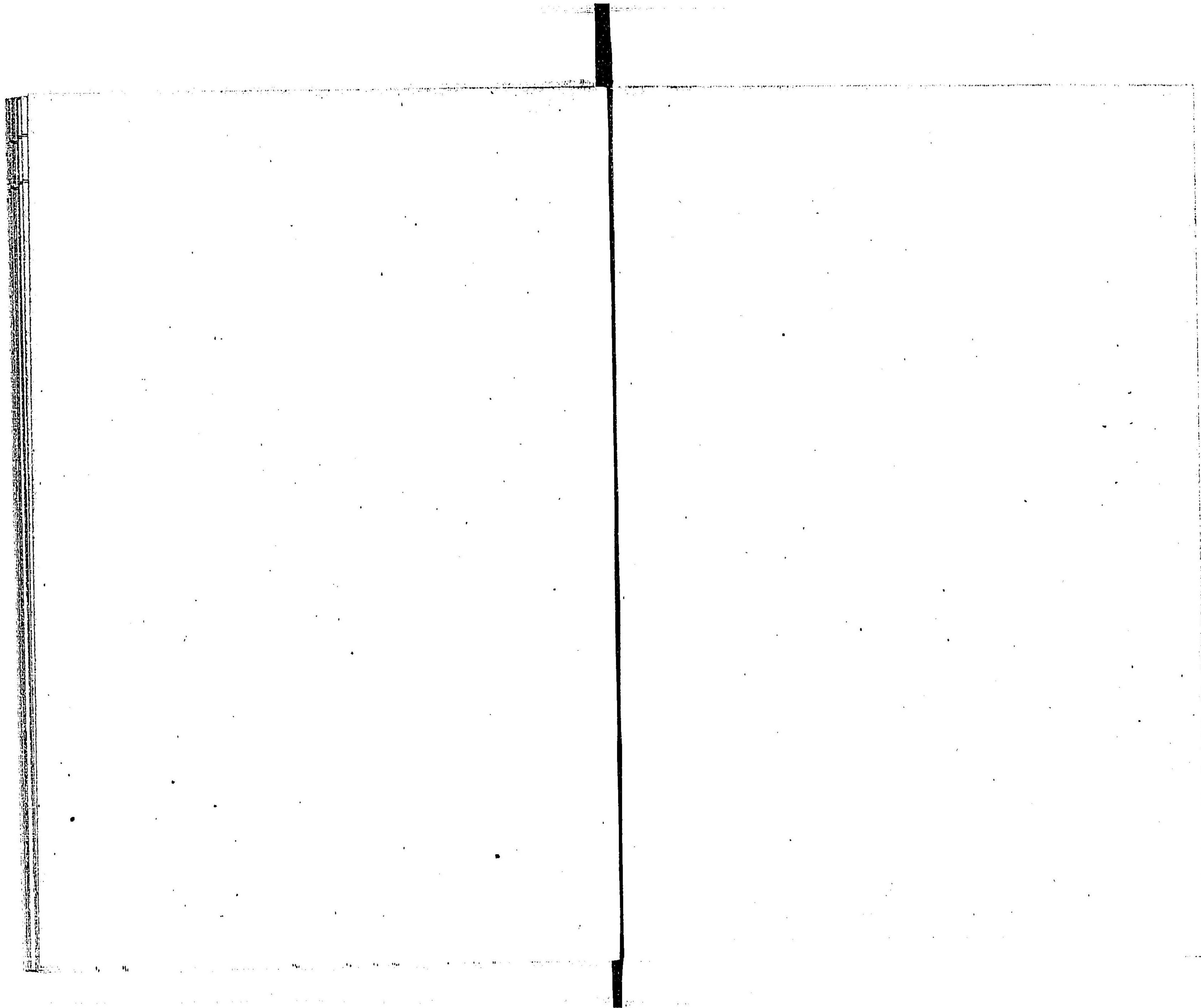
應 費 運 搬 費

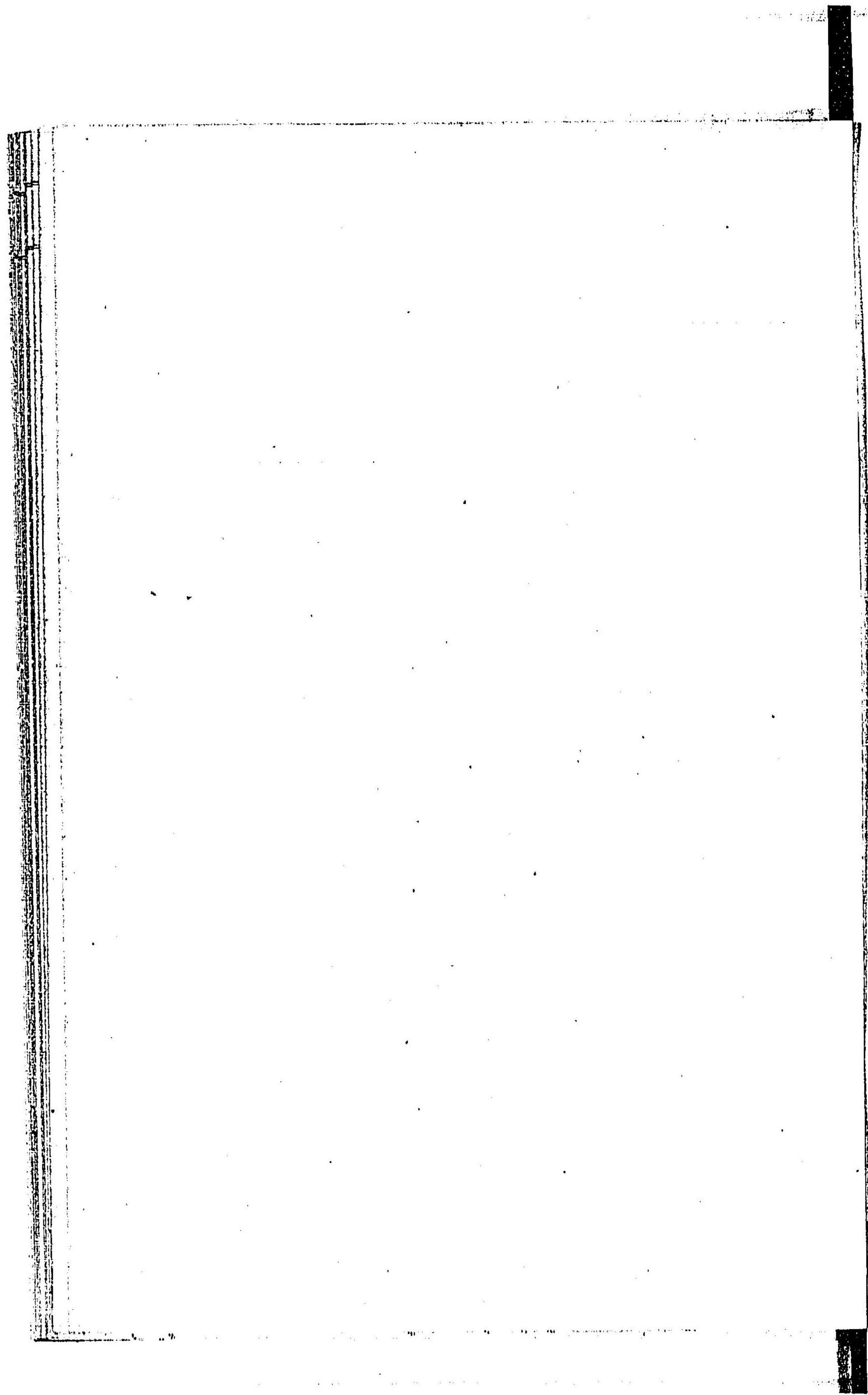
12.

年月日	摘要	借方		貸方			借或貸	残		
		圓	錢	圓	錢	厘		圓	錢	厘
何年 七 一 五	豫算御達高 御用物何所へ運送諸費		12 00 0	50 00 0			貸	50 00 0		
								38 00 0		

何年度經費預算殘高表

13. 應 費 賄 費										何年度經費預算殘高表																																																		
年月日		摘要		借方			貸方			借或貸			殘			勘定科目			借方			勘定科目			貸方																																			
何年				圓	錢	厘	圓	錢	厘		圓	錢	厘	圓	錢	厘	追テ受入ヘキ高			追テ支出スヘキ高			圓	錢	厘																																			
七	-	豫算御達高					50	00	0	貸	50	00	0	國庫 元受 假出 金	9.000	00	0	俸給	書記官俸給	1.100	00	0	雜給	厨官俸給	5.100	00	0	旅費	3.115	00	0	僱給	715	00	0	賞與	150	00	0	廳費	備品	420	00	0	消耗品	273	00	0	郵便稅	99	00	0	運搬費	38	00	0	賄費	50	00	0
										縮高圓			11.060	00	0	縮高圓			11.060	00	0																																							





會計法ハ(千
百十九)ニ掲
出ス

第一千二百八十一 明治十五年二月十四日大藏省第五號府へ達
會計法第二拾七條收支現計書報告書別冊之通リ書式相定候條明治十五年一月分ヨリ右ニ准

據可差出此旨相達候事

別冊

收支現計書及ヒ報告書々式凡例

- 一 收支現計書報告書ハ甲月收支ノ分ヲ乙月六日迄ニ調製シ翌七日ニ其廳ヲ發スヘシ
- 一 收支現計書ハ國庫ニ對シ直ニ納受セシモノ報告書ハ打切金置據金ノ仕拂營業資本ノ運轉又ハ他廳ヲ經由シテ收支スルモノ起業金及ヒ預リ金ノ類ヲ類別區畫シ遺漏ナク掲載スルモノトス
- 一 收支現計書ハ各年度ヲ區別シテ調理スルモノトス故ニ該年度ヲ經過スルモ猶其年度所屬ノ收支ヲ了セザル間ハ其年度ノ現計書トシテ調理スヘシ例ヘハ十四年度ノ收支ヲ十五年年月ヲ書シ十四年度收報告書ハ年度ノ經過ニ隨ヒ現出納セル年度ヲ以テ調製スル者トス支現計書ト記載スヘシ報告書ニ於テ其殘額ヲ据置拂ニナスルハ同期ノ報告書ノ元受ニ編入スヘシ
- 一 出納閉鎖ノ期ニ際シ經費ノ決算ニ至ラスシテ打切拂ニ立ツルモノハ同期ノ報告書中打切金ノ部ヲ設ケ編入スヘシ
- 一 各廳ニ於テ收入シ所管ノ廳へ送付スル鑛山稅代言免許料ノ類ハ報告書中租稅ノ部へ編入スヘシ

- 一 興業費ノ内起業金ト連帶支辨ニ係ルモノハ仕拂内譯ヲ要セス各其本部ニ編入スヘシ
- 一 傳票番號トハ納入金ニアリテハ大藏省ヨリ受領シタル證書ニ記載セル傳票番號受取金ニアリテハ出納局及驛遞局ヨリ通報セルモノヲ指稱ス
- 一 差引殘高即チ對比ノ差額ハ渾テ朱記スヘシ
- 一 豫算内ニシテ時價ヲ以テ正貨ヲ交換セシキハ正貨ハ入ニ立テ代リ金ハ拂ニ立ツヘシ
- 一 遠隔ノ支廳若シクハ出張所及ヒ神社費等ノ現計書報告書編成方ハ左ノ期節ニ應シ編入スヘシ
- 一 本廳ヲ距ル二百里未滿ハ本廳同期若シクハ次期二百里以外ハ次期又ハ三期ニ編入スヘシ
- 一 收支現計書及報告書ヲ差出ス時ハ本書末日ノ日計表バーランシートヲ添付スヘシ
- 一 收支現計書及ヒ報告書用紙ハ常用野紙(フールスカップ)表紙ハ適宜厚紙ヲ用フヘシ

明治十五年第五號達附屬

年中何年何號年

計現支收

書告報

名廳

模本中縦ノ並單野及ヒ●ヲ付スル横
線并上層ノ横線及ヒ()ヲ付スル字ハ
原本總テ朱刷表題ノ横並線亦同

借方	年度			返			納之部			〔(國債局へ納付ノ分)〕			貸方		
	圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘
前月未納高	600	00	0				大藏省へ返納高								
本月收入高	1.800	00	0				諸貸出金返納	900	00	0					
							官方及舊藩々貸金返納	570	00	0					
							石高貸下返納	730	00	0					
											2.200	00	0		
							[差引未納高]				[200	00	0]		
總計圓				2.400	00	0	總計圓						2.400	00	0

明治十五年第五號達附屬

年 號 何 年 何 月 中

年 度

收 支 現 計 書

年號何年何月中收支現計書面之通
相違無之候此段報告仕候也
會計主務官名印

大藏卿宛

年號何年何月何日

廳 名

借方

年度作業

益金之部

貸方 2.

本月收入高

總計圓

圓 錢 厘
150.000 00 0

150.000

納入高

何所何益大級省納 傳票何號

何所何益大級省納 傳票何號

何所何益大級省納 傳票何號

總計圓

圓 錢 厘
80.000 00 0

50.000 00 0

20.000 00 0

圓 錢 厘
150.000 00 0

借方

年度何々

	圓	錢	厘	圓	錢	厘
前月ヨリ越高						
壹圓銀貨	200	00	0			
紙幣及銅貨	100	00	0			
				300	00	0
本月何日受取高 但傳票何號				640	00	0
本月交換受入高						
壹圓銀貨 但何月何日平均價格何圓何錢				100	00	0
本月戻入高						
何俸給但何月中仕掛ノ分何々ノ事故ニ依リ戻入				5	00	0
總計圓				1,045	00	0

之部

〔經費大科目〕

貸方

3.

	圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘
本廳									
俸給									
何俸給	250	00	0						
何俸給	140	00	0						
何俸給	100	00	0						
							490	00	0
廳費									
電信料	1	50	0						
備品	10	00	0						
							11	50	0
外國行諸費									
旅費 但壹圓銀貨	50	00	0						
雜品費	25	00	0						
							275	00	0
本廳仕掛高									
何支廳							776	50	0
俸給 但屬官ノ分									
廳費							10	00	0
備品	2	00	0						
消耗品	1	00	0						
							3	00	0
何支廳仕掛高									
交換仕掛高									
壹圓銀ト交換代リ金									
[差引殘高]									
[假掛高]									
[壹圓銀貨]							[25	00	0]
[現在高]									
[紙幣及銅貨]							[80	50	0]
							[105	50	0]
總計圓							1,045	00	0

借方

年度何

々之部

貸方 4.

[元受高書式略ス]

圓 錢 厘 圓 錢 厘
[還納金有之件ノ例]

[中小細科目書式略ス] 仕拂高
還納高
何年何月何日大機省納傳票何號

圓 錢 厘 圓 錢 厘 圓 錢 厘

總計圓

0

總計圓

0

[元受高書式略ス]

[打切拂有之件ノ例]

0

[但會計法第廿九條ニ係ル分モ之ニ倣ヘ]

[中小細科目書式略ス] 仕拂高
打切拂高 (据置拂高)
何々
何々

圓 錢 厘 圓 錢 厘 圓 錢 厘

總計圓

0

總計圓

0

[起業費補足トシテ受取タル興
年 度 興

[業費アル應ノ式]

業費之部

本月何日受取高
但傳票何號

10.000 00 0

仕拂高
何所起業費補足トシテ拂出
〔此分起業金ト連帶支辨ニ
係ルヲ以テ内譯ヲ安セス〕

圓 錢 厘 圓 錢 厘 圓 錢 厘

10.000 00 0

借方

年度起業

金之部 [國庫へ對シ直ニ受拂ヒシ應ニ限ル]

貸方 G.

	圓	錢	厘	圓	錢	厘
前月ヨリ越高				30.000	00	0
本月何日受取高 但傳票何號				125.000	00	0
(興業費ノ連帶支辨セル應ノ式)						
本月何日受取高				125.000	00	0
但傳票何號						
總計圓				155.000	00	0

何所何費	圓	錢	厘	圓	錢	厘	圓	錢	厘
出張應諸費									
需用費	180	00	0						
運送費	870	00	0						
建築費				530	00	0			
新營	289	00	0						
修繕	81	00	0						
				270	00	0			
							620	00	0
[差引殘高]									
[假拂高]							(112.880	00	
[現在高]							(42.000	00	
									(145.880 00 0)
總計圓							155.000	00	0
仕拂高									
興業費ノ連帶支辨ノ爲メ排出 〔此分興業費ノ連帶支辨ニ 係ルヲ以テ内譯ヲ要セス〕							125.000	00	0

年號何年何月中何年度收支現計書
面之通相違無之候也

會計主務官名印

大藏卿宛

年號何年何月何日

〔最尾ノ結文〕

年號何年何月中何年度收支現計書
面之通相違無之候就テハ何年度ニ
屬スル收支現計完結候也

第千二百八十一 明治十七年六月十七日大藏省第四拾號縣^府へ達

明治十五年二月第五號ヲ以テ相達候收支現計書報告書々式中及ヒ同年八月第貳拾九號ヲ以テ相達候金錢出納記簿ノ組織摸本中左ノ廉々改正候條明治十七年度分ヨリ施行可致此旨相達候事

明治十五年二月十四日大藏省第五號達 收支現計書及報告書摸本中改正ノ廉々左ノ如シ

- 一 收支現計書第壹葉雜收入ノ部借方金額桁ニ一桁ヲ増シ本月收入高ノ下へ其收入金ヲ各科目ニ分チテ記載スルコトニ改メ過納ニ付下戻ノ爲メ受入高ト有ルヲ大藏省ヨリ戻入高トシ其下へ戻入金ヲ各科目ニ分チテ記載スルコトニ改メ
 - 一 同上貸方大藏省へ納附高ノ座傳票番號ハ納證番號ニ改メ事故アリ下戻高トアルヲ本月下戻高トシ其下へ下戻金ヲ各科目ニ分チテ記載スルコトニ改メ差引殘高中假納高ノ座ヲ刪除ス
 - 一 收支現計書第三葉經費ノ部借方金額桁ニ一桁ヲ増シ本月戻入高ノ下へ貸方ノ書式ニ準シ戻入高ヲ各科目ニ分チテ記載スルコトニ改ム
 - 一 同上貸方差引殘高中假拂高ノ座ヲ刪除ス
 - 一 收支現計書第四葉貸方還納高ノ座ニ在ル傳票番號ハ納證番號ニ改ム
 - 一 現計書及報告書中改正ノ書式ニ照觸スル廉々ハ都テ右各項ニ準シテ改正スルモトス
- 明治十五年八月廿九日大藏省第廿九號達 記簿組織摸本中改正ノ廉々左ノ如シ
- 一 雜收入内譯簿假納ノ座經費内譯簿假出金ノ座及雜收入豫算殘高表中假納金經費豫算殘高

表中假出金ノ二廉ヲ删除ス

一日記簿第三葉朱字ノ但書拾壹字ヲ删除ス同葉及雜收入内譯簿大藏省勘定ノ座ニアル納付金ハ之ヲ大藏省ヘ送付スルト全時ニ該座ノ借方ニ記入シテ上納證書ノ番號ヲ附記シ傳票番號ハ別ニ其扣簿ヲ設ケテ記入スルモノトス

一雜收入内譯簿雜收入金ノ座ニアル出納局ヘ假納ヲ大藏省ヘ送付ト改ム

一諸費ノ假出アルキハ本拂ト均シク直チニ當該科目ノ借方ニ記入シ過剩返納又ハ未決算翌年度繰越等アルキハ之ヲ其貸方ニ記入シ而シテ該員額ハ現行ノ書式ニ據リ扣除ヲナスモノトス

第千二百八十二 明治十五年九月三十日大藏省第三拾四號府達

本年二月第五號ヲ以相達候收支現計報告書々式摸本中打切金ノ目ヲ設ケ有之候處右ハ据置金一同現計書經費元受ノ方前月ヨリ越高ノ次ニ前年度ヨリ繰越金ノ目ヲ設ケ其仕拂ハ相當年度ノ分ト同一仕拂ニ相立候義ト可相心得此旨相達候事

但シ收支現計書并ニ報告書差出濟ノ分ハ更訂ニ不及候事

第千二百八十三 明治十五年十二月二十三日大藏省第五拾三號府達

本年九月第三十四號ヲ以繰越金ノ儀相達候處十二年度以前ニ係ル打切金据置金ハ猶從前ノ通可相心得此旨更ニ相達候事十六年第十九號省達ヲ以テ打切(据置金)ノ三字ヲ追加ス

第千二百八十四 明治十六年一月十一日大藏省第貳號府達

從來各廳收支計算上洋銀ヲ別項ニ立候處本年一月ヨリハ貿易壹圓銀ノ内ヘ結込計算可致候

此旨相達候事

○第拾三款 金札引替及金祿公債證書交換拂入紙幣并手數料納付方

第千二百八十五 明治十三年七月三十一日大藏省乙第貳拾八號府達

本年當省甲第七十一號ヲ以金祿公債證書交換ノ義布達中右手數料ノ儀ハ每三ヶ月取經其年度稅外收入トシ納付可致此旨相達候事

第千二百八十六 明治十四年四月六日大藏省乙第五號府達

明治十二年十一月十一日當省甲第百貳拾三號布達第一條金札引換公價拂入金トシテ受取タル紙幣ハ東京府及出納局出張明治十二年十一月十八日當省番外達ニ照準大藏卿ノ印面ヲ打拔候上通常物品所有之府縣ヲ除ク見做シ右打拔候印面一同出納局宛ノ上納證書ト共ニ國債局ヘ送附可致此旨相達候事

但卿印打拔手數料及ヒ遞送賃ハ貨幣交換費中ヘ證書引換紙幣送納費ノ細科目ヲ設ケ仕拂フヘク且該紙幣請願人ヨリ管廳ヘ相納候際鑑定手數料ハ請願者ヲシテ自辨セシムル儀ト可相心得事

○第五章 經費及諸費

○第壹款 經費豫算

○第壹節 豫算帳

甲第七十一號
布達ハ(千五
百三十一)ニ
掲出ス

甲第百廿三號
布達ハ(千五
百十四)ニ掲
出ス

〔金〕
合計金

〔中科目〕
何々

〔何年度實費〕

一金

〔總テ前例ニ倣フ〕

〔何年度實費〕

〔金〕

〔但云々前年度豫算高ト増減セシ事由ノ大要ヲ記載ス〕
右者何年度何々豫算書面之通有之候也

年 月 日

大 藏 卿 宛

長 官 名 印

附 豫算須知十四年乙第四十四號省
録 豫算須知達ヲ以テ改正ニ付除ク
税 外 豫算帳

第千三百八十八

明治十四年十一月十五日大藏省乙第四拾四號府へ達

明治十二年當省乙第六號達附録豫算須知ノ儀別紙ノ通更正候條此旨相達候事

豫 算 須 知

一	定規ノ額ニ據テ豫算ヲ立ルモノ	俸給ノ内屬官俸給、廳費、史誌編輯費、等
二	前年十一月一日ノ現員ニ據テ豫算ヲ立ルモノ	俸給ノ内屬官俸給、招魂社費、雜件ノ内例祭金幣料、恩賜ノ内負傷再發ノ者療治料、陸軍元兵卒終身扶持、救助費ノ内窮民恤救、棄兒養育、等
三	實際仕拂ニ臨ミ申請スルモノ	徴兵費、社寺祿、賞勳年金、軍人恩給、沖繩縣士族金祿、社寺役俸(縣)等

右ノ外ハ八年度以降追々達示ノ趣旨ニ因リ豫算ヲ立ツヘシ

第二區中上層前年トアルハ假令八十五年度ナラハ十四年ヲ云フ
全上恩賜ノ内負傷再發ノモノ療治料トアルハ十二年第二十二號公達ニヨリ給スルモノ
全上陸軍元兵卒終身扶持トアルハ十三年內務大藏兩省乙第十四號達ニ係ルモノ

第千三百八十九 明治十五年一月十一日第貳號府縣(沖繩)へ達
各府縣經費ノ内屬官俸給廳費史誌編輯費招魂社費神社費ノ五項ハ自今豫算帳大藏省へ差出スニ不及候條此旨相達候事

第千三百九十一 明治十五年十一月十四日大藏省第四拾六號府へ達

一十六年度已降雜收入豫算帳中經常臨時ヲ區分記載スヘシ

一經費并雜收入豫算帳十六年度已降正副貳冊差出スヘシ

一徵兵費十六年度已降豫算相立經費豫算帳へ編入スヘシ

右相達候事

第千三百九十一 明治十六年一月廿六日大藏省第七拾四號府へ達

經費豫算調書之儀ハ會計法第十一條ニ照シ細科目ニ至ルマテ前々年度ノ實額ト前年度ノ豫算額トヲ傍記可致管ニ候處間々員額ノミヲ掲ケ傍記ヲ欠キ候モノ有之不都合ニ候條十七年度ノ調書ヨリ會計法第拾一條ニ適合候様調整可致此旨相達候事

○第貳節 府縣現員表及傭入外國人明細簿

○第壹項 府縣職員表

第千三百九十二 明治九年二月廿四日大藏省乙第貳拾六號府へ達

勅奏判等外ニ至ルマテ明治八年以降毎年十二月三十一日現任ノ官員其他別紙表式ニ照準取調翌年三月限可差出此旨相達候事

但昨八年分ハ來ル四月限り差出可申事

府	何	官	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	外	外	外	外	計
縣	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	等	計

職員表

官	等	一	二	三	四	掌	丁	掌	丁	計
區	學務	戶長	小學教員	病院醫師	何	何	何	何	何	合
長	締取	長	員	師	々	々	々	々	計	
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人

第千三百九十三 明治十一年十二月廿七日大藏省乙第七拾壹號府へ達

明治九年ニ當省乙第二十六號ヲ以テ毎年十二月三十一日現任官員表差出方相達候處同等ノ官員ニシテ給俸ニ差違アル者ノ如キ類及ヒ地方ニテ適宜給料ヲ定メ候者ニシテ如キ類等ノ官員ノミニテ其給額ノ多少不相分候テハ不都合ニ付本年分ヨリ右等ニ限リ一ヶ月ノ給料若干一名又ハ一ヶ月ノ給料若干、幾名ト別格ヲ設ケ記載可致尤官費ヲ以テ支給スル者ト地方稅等ヲ以テ支給スル者ト判然候様殊別ニ表面取調可申此旨相達候事

病身疾	何人	米若干	幾日	○	米若干	○
全上女	何人	米若干	幾日	○	米若干	○
細身十三 年以下	何人	○	○	米若干	米若干	○
合計	○	○	○	米若干	金若干	金若干

西南征討役買傷者歸郷後再發ノ者療治料(十二年第二十號公達ニヨリ給スルモノ)

人名	診察料	一日	延日數	計
何某	金若干	金若干	若干	金若干
何某	金若干	金若干	若干	金若干
合計	○	○	○	金若干

(此他給與スルモノアラハ適宜欄ヲ設ケテ列載スヘシ)

陸軍元兵卒傷痍終身扶持(十三年內兩省七第十四號達ニ係ルモノ)

人名	經伺之年月日	給額	代金
何某	年月日某省指令(達)	何人扶持	金若干
何某	年月日某省指令(達)	何人扶持	金若干
合計			金若干

合計	○	○	金若干
----	---	---	-----

右ノ外終身給與又ハ扶助等ノ類(東京府ノ井上千代野特ニ許可ヲ經テ支給スルモノアラハ適宜野格ヲ設ケ掲載スヘシ)尤其許可ノ年月日ヲ傍記スヘシ

○第貳項 各廳備入外國人明細簿

第千三百九十五 明治七年六月十三日第七拾九號 院省使へ達
 明治六年四月第百三十三號達職員月給錄差出方ノ儀詮議ノ次第有之自今相廢シ候尤雇入外國人ノ儀ハ月給其外別紙書式ニ照シ一箇年ヲ六月十二月兩度ニ仕切取調各省ハ七月一月共三十一日開拓使府縣ハ二月八月十五日ヲ限リ正院並大藏省へ可差出此旨相達候事(十三年五號公達ヲ以テ但書刪除ス別紙)

雇入外國人明細簿編制式

凡例

- 一 每半年中ノ在員ヲ調査シテ掲出洩ルヘイナカルヘシ
- 一 雇入期限其他定約ニ係ルモノハ總テ定式ノ如ク記シ若シ雇繼延期ノ如キ又ハ八月給宿料等ヲ増額スルハ横書ヲ施シ其下ニ年月金員ヲ記スヘシ

一 期限内事故アリテ雇止ルルモ前例ニ倣テ記入スヘシ
 一 奉職ノ地縦令ハ鐵道寮雇入ニシテ本寮ニ奉仕スルト横濱東京間ノ鐵道館ニ從事スルトノ區別ヲ以テ現在奉職ノ地名ヲ掲ケ爾後轉勤スレハ例ノ如ク記入スヘシ
 一 月給宿料食料ハ每半年分支給スル所ノ現費ヲ毎項總計シ増減ノ巨細ハ内譯ニ記載スルヲ則トス
 一 備入中非常有功ノモノ並ニ職務勉勵ノモノ滿期雇濟ノ節各廳於テ賞與スル賜金ノ總額モ每半年中現實施行ノ分ハ前條ニ倣ヒ列載シテ其事由ヲ掲クヘシ
 一 節約濟ノ上其本國ヨリ未タ來着セスト雖モ支度料又ハ旅費ヲ送致スルコトアレハ其金員ヲ掲クルヲ月給其他ノ例ニ全シ
 一 全國一般人民私費ヲ以テ雇入ノ分ハ使府縣於テ精査シ乙號書式ニ倣ヒ總テ別冊ニ記載スヘシ

一 雇期 何年何月ヨリ 何年何月ヨリ
 一 月給 何月何月マテ 何年何月マテ 何年何月マテ 何年何月マテ
 一 旅費 往返何圓ツ、又ハ歸國費何圓 何年何月ヨリ何圓増カ減カ 前ニ全シ
 一 食料 何月何月 何年何月ヨリ 何年何月マテ 何年何月マテ 何年何月マテ
 一 宿料 何月何月 何年何月ヨリ 何年何月マテ 何年何月マテ 何年何月マテ

何國人 姓 年 齡 名

一 學科何々或ハ技術何々
 一 奉職場所何寮又ハ何所
 右半年分支給高

何月ヨリ何々へ轉勤

金何百圓

月給幾月分

金何圓

食料

内譯前ニ全シ

宿料

金何圓

何國人 姓

年 齡 名

以下書式前ニ全シ

人員 幾 名
 月給 金何圓
 宿料 金何圓
 食料 金何圓
 旅費 金何圓

何國人 姓 名

一 雇期 何年何月ヨリ何年何月
 或ハ試験中期限未定カ
 一月給 何ケ月
 一 職業 或ハ工藝何々
 一 雇主 人名或ハ社名

何國人 姓 年 名 年 齡

以下前ニ全シ

第三節 經費科目

第一千二百九十六

明治十二年十二月廿七日第五拾號官省院使へ達

明治八年(院省使廳ハ五月十八日府縣ハ三月第三十六號)達豫算雜形ノ内經費概目相廢シ經費科目條例別紙ノ通相定候條十三年度ヨリ施行スヘシ此旨相達候事

但經費中許可ヲ經テ施行スヘキ條件ハ總テ從前ノ通心得ヘシ

別紙

經費科目條例

第一條 經費科目ヲ分ツテ大中小細ノ四科目トス
 第二條 毎大科目ヲ分ツテ中科目ヲ置キ毎中科目ヲ分ツテ小科目ヲ置キ毎小科目ヲ分ツテ

細科目ヲ置キ細科目中附スルニ細節ヲ以テス

但細節ハ從前ノ細目ニ異ルナシ

第三條 小科目以上ノ費額ハ彼是流用スルヲ許サス若シ止ムヲ得サル事故アリテ之ヲ流用セントスル時ハ其事由ヲ具シ官省院使局ハ太政官へ府縣ハ大藏省へ伺出ヘシ

但營業費ハ此限ニ非ス

第四條 各科目ハ別冊科目表ニ照準シ毎歲費用ノ有無ニ依リ取捨スヘシ尤臨時ニ大科目ヲ設クルハ大藏省ヨリ達スヘシ

第五條 各小科目ニ相當ノ名義ナク編入シ難キ費途アル時ハ別ニ雜件ノ小科目ヲ設テ之ヲ編入シ又小科目中ニ相當ノ細科目ナキ時ハ別ニ細科目ヲ設クヘシ但其名義ハ俸給雜給廳費等ノ小科目中ニアル細科目ヲ用ユヘシ

第六條 各細科目ノ内備品消耗品ノ類其區分疑似ニ涉ルモノハ該廳ノ目的ニ應シ編入スヘシ

第七條 事款ノ變更等ニ因リ中科目以下各科目ノ刪補ヲ要スル時ハ該年度豫算編成以前其緣由ヲ詳悉シ官省院使局ハ大藏省へ申出府縣ハ同省へ伺出ヘシ

第八條 此科目條例ハ大藏省ヨリ受取同省へ勘定仕上ケ致スヘキ經費ニ限ルヘシ

經費科目表畧ス

附錄

明治十四年一月二十九日内務省乙第四號府縣(東京)へ達
 明治十二年十二月二十號公達府縣所管經費科目表恩賜費之部死傷手當ノ細節ニ元巡

第三部 第四編 第五章 第壹款 第二節

十五年第二十
 八號公達ヲ以
 テ科目中數段
 (雜費)及必將
 ノ費用)ノ八
 字ヲ刪除ス以
 下畧

查俸職中公事ノ爲メ傷病ヲ受ケシモノヘ給スルノ類トアルハ西南騷擾等ノ際鎮撫ノ爲メ死傷セシモノヘ給スル手當ニシテ明治八年一第三號公達警察吏員傷病規則ノ條款ニ依リ給與スル療治扶助吊祭料ハ從前之通警察費ヨリ支辨ス可キ筈ニ候條爲心得此旨相達候事

〔第千二百九十七〕 明治十三年十二月二十五日大藏省乙第四拾五號府へ達

一 本年一當省乙第五號達現員表ノ儀獄署諸費以下ヲ除キ十四年度以降モ右ニ照準豫算帳ヘ添付差出ヘシ現員表ハ十四年乙第四十三號省達ニ依リ消ル
 一 稅外收入ノ儀十三年度所屬ノ分ヨリ總テ雜收入ト稱スヘシ尤書類送致濟ノ分ハ改メテ差出ニ及ハス

但作業有之向ハ作業益金ノ名稱ヲ以別ニ受拂勘定帳調製スヘシ

一 經費科目ノ儀事款ノ變更等ニ據リ刪補ヲ要スル廉有之ニ付概表相達スル條右ニ準據スヘシ

右相達候事

科目概表

本廳

小科目 細科目

陵墓守丁及守丁八十六年第一四十三號公達ヲ以テ宮内省へ被屬

俸給	
○ 知事俸給	○ 令俸給
○ 書記官俸給	○ 屬官俸給
等外月給備給寫字生給及事務勉勵手當金トモ○但増員月給モ此内ニ編入ス	
○ 陵守俸給	○ 墓守俸給
○ 守丁俸給	○ 備外國人俸給
(二府四港)	
○ 管内旅費 土木營繕ニ係ル旅費酒造檢査ニ係ル旅費登用放免ニ係ル旅費證人呼出旅費ノ四細節ヲ設ケ其他巡視或ハ荒地調査等ニ係ル種々ノ旅費ハ適宜類集スヘシ	
○ 管外旅費	○ 月手當
(沖繩縣)	
○ 勉勵賜金	○ 滿年賜金
十二年十二月二十六日番外公達ニヨリ賜ル分	
○ 交際手當	(開港場アル府縣)
○ 被服料	現物代料ノ別ナク給與スルモノ ○但貸與スルモノハ備品へ編入ス

雜件	
○ 備米諸費	(鹿兒島縣)
○ 衛生費	(東京府)
○ 島々救助米代	(東京府)
○ 鳥島人民救助	(沖繩縣)

備
 應費ト恩賜トニ全名ノ細科目アリ其區分ヲ明ニスルタメ試ニ死傷手當ノ細科目ニ據リ之ヲ例セハ其應於テ使役スルモノ死傷セル時手當ヲ給スルナレハ應費ニ屬シ奉職中傷病ヲ受ルモノ罷免ノ後管轄廳ヲ經由シテ手當ヲ給スルナレハ恩賜ニ屬ス
 考
 餘右ニ準ス

〔第千二百九十八〕 明治十六年十一月二十日大藏省第七拾三號(東京大坂)府(東京大坂)府ヲ除ク)へ達
 捐傷其他ノ紙幣ニシテ印面打抜ヲ要スル分該器械費ノ儀ハ十五年度以降本廳經費中貨幣交換費ノ小科目中「印面打拔器械費」ノ細科目ヲ設ケ勘定整理可致此旨相達候事

〔第千二百九十九〕 明治十七年二月十二日大藏省第拾八號(東京大坂)府(東京大坂)府ヲ除ク)へ達
 本年一月第二號及第五號ノ公達ニヨリ右ニ屬スル仕拂有之節ハ經費俸給中へ「非職俸給」及應費中へ「退職賜金」(死去職官等)ノ細科目ヲ設ケ整理候儀ト可相心得此旨相達候事

第三號公達ハ(四百六)第五號公達ハ(千八百四十七)ニ出ス

○ 第四節 經費据置及科目流用并据置ノ事

〔第千四百一〕 明治十四年七月十九日第六拾二號(東京大坂)府(東京大坂)府ヲ除ク)へ達
 各府縣經費ノ内屬官俸給(應費)(沖繩縣)史誌編輯費、招魂社費、地籍編纂費、警察費(國庫下)分ノ六項ハ會計法第三十二條ニ拘ハラヌ殘餘アラハ据置翌年度ノ該費ニ充用スヘシ此旨相達候事

〔第千四百一〕 明治十五年四月二十八日第貳拾壹號(東京大坂)府(東京大坂)府ヲ除ク)へ達
 明治十五年度ヨリ十七年度迄各廳通常經費定額据置ノ儀相達候ニ付年限中右定額金年々ノ殘金及ヒ中科目以下ノ流用ハ會計法ニ據ラス左ノ通相心得處分スヘシ

第一條
 各廳ニ於テ毎年度定額金殘餘アルキハ翌年度ノ定額金ニ併セ使用スルヲ得其金員ハ大藏省ヲ經由シテ太政官ニ開申スヘシ
 但決算以前ニ支出ヲナサントスルキハ概算ヲ以テ一應本文ノ手續ヲナスヘシ

第二條
 据置定額内中科目以下ノ費額ハ各廳ニ於テ便宜流用スルヲ得

第三條
 各廳ニ於テ第一條ノ殘金ヲ支出シ及ヒ第二條ノ流用ヲナサントスルキ事務ノ興廢伸縮ニ係ルモノハ大藏省ヲ經由シテ太政官ノ許可ヲ請ケ其興廢伸縮ニ係ラサルモノハ科目金員事由ヲ詳記シ其都度大藏省及ヒ會計檢査院ニ報告スヘシ

(千二百二十)參

右相達候事

〔第千四百二〕 明治十六年六月十六日大藏省第三拾九號附へ達
各廳經費ノ内攝置額ニシテ翌年度へ繰越スヘキ分ハ別紙書式ニ照準金員科目ヲ記載シ毎年
度末ニ當省へ可差出此旨相達候事
但十四年度分ヨリ可差出事

別紙

書式

(用紙美濃野紙)

印ハ朱書

何年度經費攝置額翌年度へ繰越之儀御届

一金何圓

翌年度へ繰越高

内

。(小科目)

金何圓

何々

金何圓

何々

金何圓

何々

右ハ何年度經費仕拂殘翌何年度へ繰越方取計申候此段御届仕候也

長官

大藏卿宛

○第貳款 廳中諸費

收支現計書見

○第壹節 官員辨當料及筆墨料

〔第千四百三〕

明治六年十一月九日大藏省第百六拾壹號達

辨當料之儀ニ付是迄布達候分總テ致廢止更ニ左之通一定候事

一官省使府縣トモ事務繁劇亦ハ差掛リ調物等ニテ退廳午後八時ヲ過レハ判任以下等外ニ到
ル迄一般ニ辨當料金三錢五厘ヲ給シ小者小使ハ二錢五厘ヲ給ス

但代料亦ハ現物ニテ交付スル儀ハ其廳ノ適宜ナルヘシ

一宿直ノ判任以上等外ハ其夕翌朝兩度分金七錢ヲ給シ小者小使ハ五錢ヲ給ス

但宿直ノ小者小使等夜中使役有之候トモ別段辨當料ヲ給セサルヘシ

一不寢番ノ者ヘハ朝夕並夜中辨當料トモ都合三度分ヲ給ス

一奏任官亦ハ御雇等ニテ月給百圓未滿ノ者宿直辨當料ハ一度分金三錢五厘ノ割ヲ以支給可
致尤奏任官並御雇ノ者共月給百圓以上ノ者ヘハ不被賜候事

右之通確定候條此旨相達候事

〔第千四百四〕

明治七年三月廿五日大藏省第三拾貳號達

判任以下事務繁劇亦ハ差掛調物等有之退廳午後八時ヲ過キ候得者辨當料一度被下候處向後
夜十二時ヲ過候節ハ二度徹夜ニ至リ候節ハ翌朝分共三度被下候條此旨相達候事

〔第千四百五〕

明治七年六月三十日大藏省第六拾九號達

官員用筆墨付與之儀或者現品或ハ代料ヲ以支給取計有之右者使不便ニ寄適宜處分不苦候得
共元款一定之成規無之ヨリ金額區々ニ付自今代料ニテ支給之向者書記事務ノ者ヘハ一月一

人金二十五錢迄其他之者ハ一人金十二錢五厘迄ヲ日途ニ致シ渡方可取計此旨相達候事
但ペンインヤ等相用候節ハ別途買上相渡可申事

○第貳節 新聞購求費

第千四百六 明治九年十一月十三日第百九號號省へ達

明治八年三月第三十五號ヲ以テ諸新聞紙官費買入ノ儀廢止候旨相達置候處各廳事務上ニ於テ
必要ノ分ハ自今定額内ヲ以テ購求候儀ハ不苦候條此旨相達候事

○第三節 史誌及地籍編輯費

第千四百七 明治七年四月廿五日第百五拾六號號府へ達

皇國地誌編輯費用ノ儀自今使府縣共一管内一ヶ年ノ額金七百圓ト相定メ本年ハ着手ノ節ヨ
リ月割ヲ以テ相渡候條大藏省ヨリ可受取尤取調方法例則等ハ追テ指揮ニ可及此旨相達候事
但是迄取調ノ費用ハ別途相渡候條明細ノ勘定帳ヲ以テ大藏省ヨリ可受取事

第千四百八 明治七年十一月十日第百四拾七號號府へ達

國史編修ニ付維新以來地方施治沿革等左ノ例則ニ依リ叙記シ正院歴史課へ可差出此旨相達
候事

但費用ノ儀ハ本年四月第五拾六號地誌編輯費額七百金ヲ以テ改テ史誌兩般ノ費用ニ支給
候條右勘定帳史誌兩廉ヲ區分シ大藏省へ可差出事

七年第百四十
七號公達(三
百七十七)參
看

同上

同上

歴史編輯例則之

第千四百九 明治九年十月三十日第百壹號號府へ達

明治七年十一月第百四十七號ヲ以テ相達候史誌編輯費本年以降金貳百五拾圓増加候條本月ヨ
リ月割ヲ以テ大藏省ヨリ可受取此旨相達候事

第千四百十 明治十年三月三十日大藏省乙第拾三號號府へ達

史誌編輯費ノ儀明治七年十一月第百四拾七號ヲ以兩般ノ費途區分可致旨公達相成居候處自
今區分ニ不及候條此旨相達候事

第千四百十一 明治十四年一月廿四日內務省乙第三號號府へ達

各廳史誌編輯費ノ內地誌ニ係ル仕拂金額事業上參查ノ都合有之候條元拂勘定書十三年度以
降別紙雛形ニ準シ調製毎年度勘定決算ノ期ヨリ十日以内ニ申報スヘシ此旨相達候事
但明治七年ヨリ全十二年度迄ノ分各年度決算勘定科目ニヨリ本文雛形ニ準シ調製來ルニ
月十日ヲ限り取東子差出スヘシ

別紙

表

明治何年度史誌編輯費元拂報告書

紙

何 縣府

明治何年度史誌編輯費元排報告書

高金

内金

一金

内譯

金 金 金 金 金 金 金 金 金 金

史誌編輯費元
前年度ヨリ送リ高
本年度受入高
地誌編輯費元排高

屬官俸給
等外俸給
備員俸給
備給
諸手当
管内旅費
管外旅費
備品
消耗品
郵便税
電信料

金 金

運搬費
賄費

外

歴史編輯費元排分

差引

但(史誌兩費ニ涉リ實際區分シ難キ分ハ其一方へ組込申由ヲ記載スヘシ)

掘置

右之通有之候也

官苗字名印

明治何年何月何日

内務卿宛

第千四百十二

明治十七年二月二日内務省乙第九號縣府へ達

各廳地籍編纂費元排金額事業上參査之都合有之候條元排勘定書十六年度以降左ノ雛形ニ準

シ調製毎年度決算之期ヨリ十日以内ニ報告スヘシ此旨相達候事

但十五年度迄ノ分ハ各年度決算勘定科目ニヨリ本文雛形ニ準シ調製來ル三月限り取束子

差出ス可シ

明治何年度地籍編纂費元排報告書

第三部 第四編 第五章 第貳款 第二節

明治何年度地籍編纂費元排報告書

高金	地籍編纂費元
内金	前年度ヨリ送高
一金	本年度受入高
内譯	地籍編纂費支排高
金	備給
金	諸手當
金	管内旅費
金	管外旅費
金	備品
金	消耗品
金	郵便税
金	電信料
金	運搬費

何府

第十七號公達
八(四百三十
四)ニ掲出ス

金
差引
殘金
右之通有之候也
年月日

内務卿宛

○第四節 賞金賜金費及海員雇入雇止ニ係ル費

第千四百十三 明治十六年十二月廿八日大藏省第七拾八號府へ達

本年三月第十七號公達第三條第二項ニ係ル費用ノ儀ハ當省ヨリ別途可下渡等ニ候條十七年
度以降ハ別ニ豫算帳ヲ調製シ通常經費ト共ニ當省へ可差出尤十七年度ノ議ハ此達ニ到達後
二週間以内ニ進達可致此旨相達候事

但本費ノ儀ハ十六年度以降賞金賜金費ノ大科目ヲ設ケ勘定整理候儀ト可相心得事

第千四百十四 明治十七年四月廿五日大藏省第貳拾五號府へ達
客年第十七號公達第三條第二項ニ係ル費用之儀ニ付同年十二月第十七號八號ヲ以テ相達候次
第ニ有之候處整理上都合有之別ニ豫算帳不及差出候條其時々請求可致此旨更ニ相達候事

第千四百十五 明治十七年五月十三日大藏省第三拾壹號府へ達
客歲第十七號ヲ以テ賞金賜金費大科目設置方等相達候處小細科目ノ義ハ左表ニ準シ勘

第三部 第四編 第五章 第貳款 第四節

定整理可致此旨相達候事

大科目	中科目	小科目	細科目
賞盃賜金圓	○	賞盃賜金費	賞盃費
			賞賜金
			褒狀費
			運搬費
			雜費

第四十五號布告ハ(千九百十六)ニ掲出ス
第十七號第百二十七號(千百

第千四百十六

明治十六年十二月廿一日第六拾三號海府及沿府縣へ達

今般第四拾五號布告候ニ付テハ雇入雇止手數料ハ大藏省へ納付可致尤右事務取扱ニ係ル費用ハ同省ヨリ別途交付候條明細仕譯書ヲ以テ同省へ受取方可申出此旨相達候事
但本文收支金額ノ義ハ明細仕譯書ヲ以テ毎三ヶ月分取經メ翌月十日其地差立農商務省へ

五十六〇參看

届出ヘシ

第五節 地價修正費及酒造検査費

第廿五號布告ハ(千七百七十八)ニ出ス

第千四百十七

明治十三年十月五日第五拾三號府縣(沖繩)へ達

本年五月第貳拾五號布告第三條地價修正ニ係ル費用中府縣廳ニ於テ要スル諸費ハ該廳經費ニ相立候儀ト可心得此旨相達候事

第千四百十八

明治十三年十二月十三日大藏省乙第四拾三號(沖繩)府縣へ達

酒造検査ニ係ル費用府縣廳經費既定額ヲ以難仕所向へ費額補填トシテ別途交付セシ處今般該金額ヲモ編入ノ上廳費被相定候ニ付十四年度以降右一切ノ費用廳費中ヲ以支辨致ス可シ此旨相達候事

第六節 官國幣社幣帛神饌料

第千四百十九

明治七年十二月十七日大藏省乙第三拾八號達

本年第百十二號公布但書當省ヨリ可下行國幣社例祭之金幣中社ハ(一社ニ付)二十圓(内四圓ハ神饌料)小社ハ(同斷)十五圓(内二圓ハ神饌料)之費額ニ候條右金額自今該(府縣)外定額金一同可相渡ニ付兼テ請取置祭典之都度仕所候條可致此旨相達候事

第千四百二十

明治九年十月十七日大藏省乙第八拾五號府縣へ達

國幣社例祭ノ節下行候幣帛神饌料ノ儀從前各神社經費ニ相立來候處來明治十年七月以降ヨ

リ各府縣ノ經費ニ相立候條該年經費豫算額外常費例祭金幣料ノ一大科目ヲ設可差出此旨相違候事

但經費勘定組ノ儀ハ定額(中社二十圓小社十五圓)ヲ以テ元拂ニ組尤小細科目ヲ掲記スルニ不及若シ該地物價ノ低減ニヨリ各社ニ於テ自然剩餘ヲ生シ候節ハ社頭經費ノ内へ差繼仕拂ニ可相立且八九兩年度ノ儀ハ神社經費ニ編入セルヲ以該社勘定帳上一旦定額高ヲ元拂ニ組殘餘アル向ハ該年度中社頭ノ經費ニ差繼仕拂ニ相立候儀ト可相心得事

官國幣社幣帛神饌料及國幣社例祭幣帛料仕拂殘金ノ儀ハ自今社入金へ可組込此旨相違候事

第七節 郵便法施行官費支出金届方

第千四百二十二 明治十六年一月廿五日大藏省第四號_{府縣}へ達

管内地方郵便法施行ノ節ハ驛遞總官ト約束取結候上官費支出ノ金額小科目限り届出候儀ト可心得此旨相違候事

但該法既ニ實施候向ハ此際右金額届出ヘシ

第八節 國稅徵收費ニ關スル諸件

第千四百二十三 明治十六年六月二十七日大藏省第四拾七號_{府縣(沖繩)除ク}へ達

明治十六年度以降國稅徵收費豫算額ニ對シ該年度中諸稅檢査事務ノ計畫等豫メ別紙甲乙雜

形ノ通取調へ毎歲八月十日限り其廳差立租稅局へ報告スヘシ此旨相違候事
但檢査員配置方等ハ所在租稅局出張所へ協議ノ上調理候義ト心得ヘシ

凡 例

一此二表ヲ調整スル所以ハ豫メ一周年ノ全國々稅徵收費_{函館札幌根室三縣ハ印紙類賣捌手類賣捌手數ニ該ル事業ノ計畫如何ヲ詳明ニシ稅務ノ考科ニ備フルモノナレハ最モ注意シ適實ノ報告ヲ爲スヘシ}

甲 號 表

一本表ハ諸稅檢査ヲ始メ總テ派出ニ係ル人員ノ配當及所屬一切ノ要費ヲ其事業毎ニ分別調整スヘシ

一甲乙事業ノ聯涉スルモノト雖モ可成的分別調整スルヲ要ス若シ分別シ能ハサルモノハ其重キ部分ニ調職シ備考ヲ設ケ其旨ヲ申明スヘシ

一俸給ハ其月十五日以前出發十六日以後歸着ノモノハ全額十六日以後出發十五日以前歸着ノモノハ半額ヲ算入スヘシ

一並旅行及急行ハ十里詰ノ方法ニ據リ日數ヲ以テ記入シ急行アルキハ(内幾日急行或ハ幾日並旅行)ト朱字ヲ以テ腹書スヘシ

一旅費日當ヲ節減セル向ハ備考へ支給額ヲ表記スヘシ

乙 號 表

一本廳費トハ則本廳常務ニ屬スル要費ヲ豫算セルモノヲ云フ

第三部 第四編 第五章 第貳款 第七節 第八節

俸給	雜給	聽費	合計
何程	何程	何程	何程
何程	何程	何程	何程
何程	何程	何程	何程
何程	何程	何程	何程
何程	何程	何程	何程
何程	何程	何程	何程

第千四百廿四

明治十六年十一月五日大藏省第七拾貳號 縣府へ達

府縣國稅徵收費ノ義來十七年度以後更ニ府縣徵稅費ノ大科目ヲ設ケ當省ニ於テ管理候條該豫算明細書別紙雛形ノ通取調前年度十一月十日限り其聽ヲ發シ差出スヘシ此旨相達候事但十七年度豫算明細書ノ義ハ往復ヲ除キ五日間ニ取調差出スヘシ

(別紙)

凡例

- 一 甲號雛形ハ豫算ノ全額ヲ掲ケ乙號雛形ハ諸稅檢査ノ爲メ派出ニ係ル費用ヲ分別スルモノトス
- 一 乙號雛形俸給ノ項月ノ端數ニ係ルモノハ十五日内外ヲ以テ全額半額ノ區分ヲ爲スヘシ
- 一 乙號雛形雜給ノ項管内旅費但書中(並旅行巡回滞在)日當ハ各其支給額ヲ明記スヘシ瀛車賃急行旅費ノ如キモ亦同シ
- 一 雛形中所載ノ計畫高ハ十七年度大藏省第五拾貳號達中諸稅檢査ノ費額ヲ指稱スルモノナリ

十七年第七十五號省達ヲ以テ(十六年度大藏省第四十七號達)ヲ(十七年度大藏省第五十二號達)トシ(檢査ノ下)計畫費ヲ(費額)ト更正ス

- 一 雛形中管外旅費備給運搬費雜費等ハ細節ヲ内譯ニ列記スヘシ
- 一 旅費ノ支給ニ變更アルモノハ豫算明細書ノ末尾(即チ宛)ニ備考ノ項ヲ設ケ詳細掲載スヘシ
- 同上
- 一 沖繩縣ハ甲號雛形ノミヲ調成スヘシ而シテ該雛形中本廳費派出費ノ内書ハ之ヲ除ク

△印ハ朱書

(甲) 明治何年度某府縣徵稅費豫算明細書

△前々年度實費

△前年度實費

一金

俸給

△但前々年度實費ニ比シ金何程増減ハ何々(事由ヲ明記スヘシ)
 △但前年度實費ニ比シ金何程増減ハ何々(事由ヲ明記スヘシ)

内

△前年度計畫高

一金

本廳費

△但前年度計畫高ニ比シ金何程増減ハ何々(事由ヲ明記スヘシ)

△前年度計畫高

一金

派出費

△但派出費取調書ニ掲載ノ通

此譯

△前々年度實費

一金

同上印紙費
手收料ノ項ヲ
刪除シ鑑札類
ヲ加フ
精以下四項

△前々年度實費	金	雜費
△前年度豫算	金	鑑札類諸費
一金		
△但前例ニ倣フ 但前例ニ倣フ		
此譯		
△前々年度實費	金	鑑札製造費
△前々年度實費	金	看板製造費
△前々年度實費	金	鑑札運搬費
△前々年度實費	金	鑑札荷造費
△前々年度實費	金	印紙類諸費
△前年度豫算	金	
一金		

△但前例ニ倣フ 但前例ニ倣フ		
此譯		
△前々年度實費	金	賣捌手數料
△前々年度實費	金	證券印紙
△前々年度實費	金	煙草印紙
△前々年度實費	金	賣藥印紙
△前々年度實費	金	訴訟用印紙
△前々年度實費	金	運搬費
△前々年度實費	金	荷造費
△前々年度實費	金	取扱手數料
△前年度豫算	金	地租代米納諸費
一金		

第三部 第四編 第五章 第貳款 第八節

△前々年度實費
金
△前年度豫算
金

合計金

△但前々年度實費ニ比シ金何程「増」減何々(事由明記スヘシ)
△但前年度豫算ニ比シ以下同前

右明治何年度當府徴稅費豫算書面之通候也

年月日

大藏卿宛

某府長官印

(乙) 明治何年度派出所費取調書

△前年度計高
一金

一金

△但前年度計高ニ比シ金何程「増」減何々(事由明記スヘシ)

内譯

酒造検査費

△前年度計高
金

金

△但前年度計高ニ比シ金何程「増」減何々(事由明記スヘシ)

内

金

收稅屬

但何等相當何人何ヶ月何等出仕何人何ヶ月分

以下細科目御用掛ハ甲號限リ列記スヘシ

同上(判任)ヲ
(收稅屬)トシ
但書(同等)ノ
下(屬)ヲ(相
當)トシ(以下
細目)トアル
ヲ(細科目)ト
レ(目)ノ下割
註ヲ加フ

同上(判任)ヲ
(收稅屬)トス

△前年度計高
金

金

△但前例ニ倣フ

金

内

管内旅費
收稅屬

但人員何人并旅行延日數何日巡回日數何日滞在日數何日分如斯

△以下之ニ倣ヒ列記スヘシ

備給

△前年度計高
金

金

△但前例ニ倣フ

内

廳費

金

金

金

金

消耗品
郵便稅
電信料
運搬費
雜費

△地目變換荒地其他地稅并證券印界紙烟草印紙發賣印紙等各稅檢査費及
(北海道三縣)物産稅檢査費等右ニ倣ヒ列記スヘシ

第三部 第四編 第五章 第貳款 第八節

△前年度計高	金	
合計金	△但前年度計高ニ比シ金何程ヲ増減何々(事由ヲ明記スヘシ)	
	内譯	俸給
金	内	收稅屬
△以下之ニ做フ	金	雜給
内	内	管内旅費
金	△以下之ニ做フ	收稅屬
金	内	備給
金	同上	應費
金	同上	消耗品
金	同上	郵便稅

右之通候也

金 金 金

電信料
運搬費
雜給

何縣印

第千四百廿五 明治十七年七月七日大藏省第五拾貳號 縣へ達

府縣徵稅費ノ儀十七年度以降當省ニ於テ管理候旨客年第七拾貳號ヲ以テ相達置候處右取扱方左ノ通心得ヘシ

一 毎年度豫算額ハ當省ヨリ可相達ニ付該額ニ基キ一周年度中稅務實施ノ順序ヲ計畫シ別紙天號書式ニ照準豫算額分賦表ヲ調製シ毎年八月十日限其廳差立主稅局へ報告スヘシ

一 前項報告ノ后其實施上大ニ變更セントスルハ其事由ヲ詳悉シ更ニ再調ノ計畫表ヲ添へ主稅局へ報告スヘシ

一 豫算上決定シタル費額例規ニ照シ流用ノ承認ヲ請フハ明治十二年當省乙第拾五號達書式ニ準據シ且細科目ニ細節ヲ付シ其事由ヲ詳記シタル仕譯書ヲ添フヘシ

一 但細科目ノ費額ヲ流用シタルハ細節ヲ付シタル仕譯書ヲ以テ毎三ヶ月主稅局へ報告スヘシ

一 豫算金ハ一般ノ例規ニ依リ年額ヲ四分シ東京府ハ十二分シ主稅局ヨリ交付スヘシ

一 徵稅費ノ實費額ハ別紙地號書式ニ照準實費支拂表ヲ調製シ毎年九月三十日限其廳差立主

第三部 第四編 第五章 第貳款 第八節

稅局へ報告スヘシ

但十六年度國稅徵收費モ本項ニ準シ報告スヘシ

一決算報告書式及差出期限ハ追テ達スヘシ

一前六項ノ外收支現計書及報告書等差出方ハ一般ノ例規ニ依ルヘシ

右相達候事

天號

明治何年度

徵稅費豫算額分賦表

何

縣府

何年度本廳員及費額表												
何掛	分掌	官等人員俸給		計分	掌官等人員俸給	計合金	給					
		何等官何人	何人				管外旅費	勉勵賜金	被服料	諸手当	諸手數料	追賃

何年度中何々派出員及費額表																
通計	印紙類諸費	小科目 細科目 賣捌手數料	鑑札類諸費	小科目 細科目 鑑札製造費	廳費	小科目 細科目 運搬費	雜給	小科目 細科目 備給	小科目 細科目 看版製造費	鑑札運搬並荷造費	取扱手數料	給			費台金	
												何區	何月	何日		何等官何人

第三部 第四編 第五章 第貳款 第八節

第三表 何年度府縣徵稅費支出額調表

計	通	何國		何郡	第一回		第二回		何日	何月	何年
		自何月何日	至何月何日		自何月何日	至何月何日					

第三表

何年度府縣徵稅費支出額調表

科目	區分	預算決定額	支出見込額			計
			本廳費	派出所費	費途未定	
俸給	何程	何	何	何	何	何
雜給	何程	何	何	何	何	何
應費	何程	何	何	何	何	何
鑑札類諸費	何程	何	何	何	何	何
印紙類諸費	何程	何	何	何	何	何
通計		何	何	何	何	何

凡例

此表ハ府縣徵稅費ノ豫算決定額ニ對シ豫メ一周年度ノ事業計畫如何ヲ詳明ニシ稅務ノ考科ニ備フルモノナレハ最モ注意シ適實ニ之ヲ調製スヘシ

第一表

一本表ハ本廳ニ屬スル各分掌ノ人員俸給及一切ノ要費ヲ豫計シテ之ヲ記載スヘシ
 但函館札幌根室三縣物產稅品運搬費却諸費營業費等ハ本文ニ倣ヒ細科目ニ細節ヲ附シ別書ヲ設ケテ記載スヘシ

第二表

一管外旅費ハ之レヲ要スヘキ事由ノ大畧ヲ備考ニ記載スヘシ
 一本表ヘハ諸稅檢査ヲ始メ總テ派出ニ係ル人員ノ配當及所屬一切ノ要費ヲ其事業毎ニ分別

第三部 第四編 第五章 第貳款 第八節

調整スヘシ

- 一 甲乙事業ノ聯涉スルモノト雖可成の分別調整スルヲ要ス若シ分別シ能ハサルモノハ其重ナル部分ニ併録シ見込ヲ以テ備考中ニ各費額ノ區分ヲ概記スヘシ
- 一 俸給ハ其月十五日以前出發十六日以後歸着ノモノハ全額十六日以後出發十五日以前歸着ノモノハ半額ヲ算入スヘシ
- 一 旅費日當ハ其定額ト節減ノ區別ヲ問ハス支給スヘキ員額ヲ備考ニ明記スヘシ

第二表

- 一本廳費トハ第一表ノ各費項ヲ集計セルモノヲ云フ
- 一派出發トハ第二表ニ掲タル各費項ヲ集計シタルモノヲ云フ
- 一 費途未定トハ各科目内ニ於テ第一表第二表掲出ノ外臨機配賦ニ備フルモノヲ云フ

明治何年度

徵稅費支拂表

何 縣府

第一表

何年度本廳實費額調表	何	掛	、	、	、	、	、	、	計
------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第二表

何年度諸稅檢査派出實費額調表

通計	體給	小科目 細科目	雜給	小科目 細科目	應費	小科目 細科目	鑑札製造費	小科目 細科目	鑑札製造費	小科目 細科目	看板製造費	小科目 細科目	運搬並荷造費	小科目 細科目	印紙類諸費	小科目 細科目	印紙類諸費	通計
	管外旅費	備品		備品		鑑札製造費		看板製造費		看板製造費		運搬並荷造費		賣捌手數料		賣捌手數料		
	勉勵賜金	消耗品		印刷費										郵便稅		郵便稅		
	被服料	印刷費		郵便稅										電信料		電信料		
	給諸手當	郵便稅		電信料										運搬費		運搬費		
	諸手數料	電信料		運搬費										荷造費		荷造費		
	追實祭資	運搬費		贈費										取扱手數料		取扱手數料		
		贈費		雜費														
		雜費																

第三部 第四編 第五章 第貳款 第八節

通計	應費	雜給		俸給
		備給	旅費及在費	

第三表

何年度府縣徵稅費支出實費額調表

計	印紙類諸費	鑑札類諸費	應費	雜給	俸給	科目區分		計
						本	應	

第一表

一本表へハ本應ニ屬スル一切ノ實費ヲ記載スヘシ尤事故アリテ九月三十日限り算定シ難キモノアラハ其仕拂フヘキ見込金額ヲ各細科目ノ内書ニ朱記シ他日確定ノ後直ニ追報スヘシ

但兩館札幌根室三縣ハ物産稅品運搬賣却諸費(細科目ヲ付シ)營繕費等ヲ掲載スヘシ

第二表

一本表へハ諸稅檢査派出ニ係ル一切ノ實費ヲ記載スヘシ

俸給ノ内月給ノモノハ發着十五日前後日給ノモノハ日數ヲ以各區分記入スルモノトス尤事故アリテ算定シ難キモノハ記載方ハ第一表ニ同シ

第三表

一本表へハ第一表第二表各費項ノ合金ヲ記載スヘシ

○第九節 徵兵入費

第千四百二十六 明治十五年三月二十日陸軍省達甲第六號附達

徵兵入費定則別冊ノ通相定候條此旨相達候事

別冊

徵兵入費定則

第一條 入營ノ節徵兵ニ附添戸長或ハ郡區書記等ノ旅費ハ地方長官適宜決定ノ日當ヲ給スヘシ但郡區徵兵事務官並ニ徵兵ニ附添戸長檢査所及抽籤場等へ往復ノ旅費ハ官ヨリ給セ

第三部 第四編 第五章 第貳款 第九節

第二條 徴兵各自居住ノ町村ヨリ検査所及徴兵署等へ往復ノ旅費ハ十里詰日當金ニ拾錢ヲ給シ若シ同所ニ滞在セシムルハ日當金貳拾八錢ヨリ多カラサル金額ヲ適宜支給スヘシ但下検査所へ往復旅費ハ官ヨリ給セス

第三條 前條徴兵旅費近方片道三里未滿ハ之ヲ給セス若シ一泊セシムルハ三里以上六里未滿ハ日當若シ一泊セシムルハ六里以上十一里未滿ハ一日ノ日當ヲ給ス十里以内ノ端里數一里以上六里未滿ハ日當ノ半數ヲ給スヘシ總テ一里未滿ハ一割給ス

第四條 徴兵検査所ヨリ直ニ抽籤場ニ至ルハ甲乙丙ノ里程ヲ通計シ第二條ノ旅費ヲ給スヘシ

第五條 免役料上納ノ者或ハ除役免役又ハ徴集猶豫相當ノ者ニシテ徴兵令第六十一條ノ届出ヲ爲スニ當リ其手續ヲ爲サス検査所又ハ抽籤場へ申立テ除役免役又ハ徴集猶豫ニ屬スル者ノ旅費並ニ滞在日當ハ給セス

第六條 檢丁ノ父兄不具等ヲ検査所或ハ抽籤場へ呼出スルハ第二條又ハ第三條ノ旅費及ヒ滞在日當ヲ給スヘシ

但檢丁癩疾不具等ニシテ付添人ヲ要セサレハ徴兵署或ハ検査所へ出頭シ難キ者ハ其付添人ノ旅費並ニ滞在日當亦本條ノ例ニ準ス

第七條 徴兵入營ノ旅費ハ十里詰日當金四拾錢ヲ給スヘシ但近方十一里未滿ノ旅費並ニ滞在日當ハ第二條及第三條ニ準スヘシ

第八條 地方徴兵醫員ハ其術業ノ優劣ヲ以テ四等ニ分チ一日一等金貳圓二等金壹圓五拾錢三等金壹圓四等金七拾五錢ヲ給シ若シ軍醫ニ隨ヒ他郷ニ出ルハ旅費定則第九章ニ準シ三等以上ハ旅費等級ノ第四等四等ハ同第五等ノ日當ヲ給スヘシ但下検査ノ費用ハ第十八條ニ準ス

第九條 筆生ハ記録ノ開闔ニ因テ一日金四拾錢ヨリ多カラサル給料ヲ適宜支給シ都合ニ因リ甲所ヨリ乙所ニ要スルハ前條第五等ノ旅費ヲ給スヘシ但下検査ノ費用ハ第十八條ニ準ス

第十條 用使ハ徴兵署及検査所ニ各二人ヲ要ス尤檢丁三百人以上ハ壹人ヲ増スヘシ右雇料一日金貳拾五錢ヨリ多カラサル金員ヲ適宜支給スヘシ

第十一條 検査所ヲ社寺等ニ設クルハ其廣狹ニ應シ一日金壹圓ヨリ多カラサル雇料ヲ適宜給スヘシ

第十二條 徴兵署検査所固有品ハ別紙物品表ノ通相心得徴兵署検査所解散ノ後ハ其府縣ニ預リ若シ翌年ニ至リ自然毀損アルハ修理ヲ加フヘシ若又一時ノ假借ニテ辨給スルハ相當ノ借料ヲ給スヘシ但徴兵下検査所用ノ物品ハ官ヨリ給セス

第十三條 前條ノ物品格護ノ儀最寄官設ノ建物ナク人民所有ノ倉庫ニ收藏ノ分ニ限り一ケ年金貳圓ヨリ多カラサル倉敷料ヲ適宜給スヘシ

第十四條 徴兵署並ニ検査所ニ於テ徴兵使或ハ副使ヨリ定則外ノ物品ヲ要スルハ其旨明細表備考ニ記載スヘシ

第十五條 徵兵入營及檢査抽籤ノ節途中川留雪支又鳥嶼ノ者船符及病氣等ニテ延滞ノ時ハ其地戸長ノ証書及醫師ノ診斷書アル者ハ滞留日當ヲ給シ且疾病足痛等ニテ歩行シ難キ者ハ醫師ノ診斷書及通運會社ノ受取證書ヲ添テ申出ルキハ其車駕賃ヲ給スヘシ尤藥價診察料等ハ自辨タルヘシ

第十六條 右入費勘定仕上ハ明治十二年太政官達第五十號經費科目表及十五年大藏省達第五號收支現計書々式ニ因リテ調製スヘシ

第十七條 前條ノ通定ムルト雖モ各廳ノ便宜ニ依リ此定則ニ基キ金額適宜減少ノ方法ヲ設クルハ若シカラズ

第十八條 徵兵支署ニ係ル諸費ハ各廳ノ經費ヲ以テ前條ノ法ニ據リ適宜ニ支給スヘシ但徵兵事務官ノ旅費ハ當省ヨリ給ス

徵兵署及檢査所物品表

徵兵署		檢査所	
品名	數量	品名	數量
人別檢査表板木	六	身幹度尺	一
テール	六十	寢臺並蒲團枕	一
椅子	二十	テール	四脚但六人掛
墨硯箱	八	椅子	十二
面	十	脚	全
年	上	年	上
品名	數量	品名	數量
品目	員	品目	員
員	十	員	十
數	十	數	十
保存期限	十五年	保存期限	十五年
年	上	年	上

朱硯箱	五	朱硯箱	四
小火鉢	二十	朱硯	三
肉鉢	二	朱硯	四
朱肉鉢	八	朱硯	三
水鉢	五	朱硯	四
糊入	四	朱硯	三
狀刺	壹	朱硯	四
帶刺	壹	朱硯	三
茶器	壹	朱硯	四
消器具	壹	朱硯	三
品目	徵兵百人ノ額	朱硯	四
西ノ内紙	二十枚	朱硯	三
半紙	二十枚	朱硯	四
鐵簿	府編大醫紙	朱硯	三
墨	八挺	朱硯	四
朱墨	五挺	朱硯	三
筆	四本	朱硯	四
炭	一日小火鉢壹個ニ付二百目湯沸炭三百目	朱硯	三
茶	一日小火鉢壹個ニ付二百目湯沸炭三百目	朱硯	四
朱硯箱	四	朱硯	三
小火鉢	二十	朱硯	四
肉鉢	二	朱硯	三
朱肉鉢	八	朱硯	四
水鉢	五	朱硯	三
糊入	四	朱硯	四
狀刺	壹	朱硯	三
帶刺	壹	朱硯	四
茶器	壹	朱硯	三
消器具	壹	朱硯	四
品目	徵兵百人ノ額	朱硯	三
手洗桶	一	朱硯	四
水手桶	一	朱硯	三
茶器	一	朱硯	四
消器具	一	朱硯	三
品目	徵兵百人ノ額	朱硯	四
品	二百枚	朱硯	三
炭	七日	朱硯	四
朱硯箱	四	朱硯	三
小火鉢	二十	朱硯	四
肉鉢	二	朱硯	三
朱肉鉢	八	朱硯	四
水鉢	五	朱硯	三
糊入	四	朱硯	四
狀刺	壹	朱硯	三
帶刺	壹	朱硯	四
茶器	壹	朱硯	三
消器具	壹	朱硯	四
品目	徵兵百人ノ額	朱硯	三
品	二百枚	朱硯	四
炭	七日	朱硯	三

備考	<p>一 固有品ノ保存年數ハ各地品物ノ精粗ニ從テ異ナルアリト雖ト豫メ年數ヲ立テ其長短ハ是ヲ實際ニ讓ル</p> <p>一 消耗品ハ總テ百人ヲ以テ比較シ百人以上ノ端數二十五人迄ハ四分ノ一二十五人以上五十人迄ハ半數五十人以上ヨリ全數ヲ給ス百人以内ノ時モ此例ニ準ス</p>
----	--

〔附錄〕 明治十三年十一月十六日內務省乙第四拾貳號 府縣(沖繩)へ達
 徴兵下検査ニ係ル經費支出方伺出候向モ往々有之候處右ハ地方稅ヲ以テ支辨候儀ト相心得左ノ通り取計フヘシ此旨相達候事

一 郡區徴兵事務官并檢丁ニ附添ヘ検査所及ヒ抽籤場等ヘ往復スル戸長ノ旅費ハ戸長職務取扱費ヨリ支出スヘシ

一 下検査所ヘ往復スル檢丁ノ旅費及ヒ下検査所用ノ物品ハ其地方ノ便宜ニ隨ヒ郡區廳中費目ヲ掲クヘシ 若クハ戸長職務費ヨリ支出スヘシ

○第拾節 官舎修繕費

〔第千四百二十七〕 明治十五年一月十日第壹號 官省院(廳)へ達
 明治九年五月第五拾三號達官舎貸渡規則第二條中修繕費ノタメ其廳ニ借置ク分ハ會計法第三十一條ニ拘ハラヌ從前ノ通可相心得此旨相達候事

但該金額ハ据置金ノ例ニ倣ヒ官舎宿代金ノ目ヲ設ケ出納勘定帳中ニ編入候儀ト心得ヘシ

九年第五十三號公達(六六)ニ掲出ス

○第拾壹節 各省ノ所管ニ係リ府縣ニ於テ取調或ハ操替ノ諸費

〔第千四百二十八〕 明治六年十二月十三日第百九號 官省院(廳)へ達
 府縣ヘ相達シ諸取調物又ハ諸事取扱爲致候儀其事務ニ寄り費用相掛候所右支給方并費用高等不相達向モ有之府縣ニ於テ差支不少趣ニ候條向後右等相達候節ハ其費用概算并受取方ノ順序等迄詳細記載スヘシ此旨相達候事

但院省定額金ヲ以仕拂候分ノ外臨時費等ニ可相立分ハ伺テ取計儀ト可相心得事

〔第千四百二十九〕 明治十三年九月廿八日第五拾號 官省院(廳)府縣(廳)へ達
 各廳主掌ノ事務上参照ノ爲メ各府縣廳ヘ令達シ調理申報セシムル事件中特ニ人民ヲシテ取調ヲ爲サシムルモノニ限り其費用ノ下渡ヲ要スル時ハ本年度以降ハ主掌官廳ノ經費中ヨリ支辨可致此旨相達候事

〔第千四百三十〕 明治十四年六月二十二日第五拾五號 官省院(廳)府縣(廳)へ達
 今般第五拾四號ヲ以テ府縣豫備金相廢止候條各廳所管ノ費用是迄府縣ニ於テ繰替置候分ハ早々拂戻シ十四年度以降ハ其支拂ニ先チ交付スヘシ此旨相達候事

○第拾貳節 印紙賣捌手數料諸費

〔第千四百三十一〕 明治九年二月十九日大藏省乙第貳拾貳號 府縣(廳)へ達
 認訴用野紙賣捌手數料其外費目區分左ノ通

第三部 第四編 第五章 第貳款 第拾節 第拾壹節 第拾貳節 二百三十七

- 一 訴訟用野紙賣捌手数料ハ額外常費
 - 一 證券印紙賣捌手数料ハ本年七月以降右同斷
 - 一 烟草印紙賣捌手数料ハ昨八年當省乙第百六十二號ヲ以相達候趣モ有之候處本年七月以降
モ右同斷
- 右ノ通可相心得此旨相達候事

○第三款 神社及從軍殉難墳墓招魂社費

○第壹節 官國幣社經費

第千四百三十二 明治八年六月十七日敎部省達書甲第九號官國幣社へ達

各社制札費之儀是迄渾テ一社之私費ニ候處自今定額金之内ヲ以テ建設修繕等取計不苦此旨相達候事

達書第貳拾四號

府 縣

今般官國幣社へ別紙甲第九號之通相達候條爲心得此旨相達候事

第千四百三十三 明治十年五月十四日第四拾貳號縣へ達

明治十年度十一年七月ヨリ神社經費金ノ儀國幣社例祭幣帛料ヲ除ノ外總テ九年度（九年六月廿四日達）ノ通相定候條成規ニ照準右ヲ以テ一周歲ノ費額支辨可致旨神官へ可相達事

但大科目金額流用ノ儀ハ大藏省へ可申出且本年豫算帳未々申牒不致向ハ差出ニ不及事

第千四百三十四 明治十一年四月廿九日第拾四號縣へ達

九年歲七第
十五號（千四
百三十）參看

明治十一年度神社經費金ノ儀十年度十一年第九十一號ヲ以テ神官ヲ廢シ更ニ祭主以下職員官等
等相定候ニ付テハ神官俸給及ヒ賜饌料其他減額可相成分ヲ除ノ外總テ同年第五第四十二號達
ノ通相定候條成規ニ照準シ右ヲ以テ一周歲ノ比較支辨可致旨神官へ可相達事

但本文減額ニ係ル分及ヒ大科目金額流用ヲ要スル分ハ往復ヲ除ノ外日數十日限り取調大
藏省へ可申出且本年豫算帳ノ儀ハ未々申牒不致向ハ差出ニ不及事

第千四百二十五 明治十二年一月三十一日大藏省乙第八號縣へ達

神社經費ノ儀ハ十一年度決定高ヨリ賜饌料ヲ控除セシ金額ヲ以當分據置候條賜饌料減額取
調可申出候就テハ神社豫算帳ノ儀モ追テ相達候迄差出ニ不及候此旨相達候事

第千四百二十六 明治十四年七月八日第六拾壹號縣へ達

官國幣社經費ノ儀十三年度定額ヲ以テ十四年度以降據置候條右金額ヲ以テ一切ノ費用支辨
可致尤剩餘ノ金買ハ返納ニ及ハス據置排ニ取計翌年度以降經費不足ノ節補充シ其他左ノ通
可相心得此旨相達候事

一 歳費定額相定タルニ付テハ遷官諸費ヲ除クノ外増額スルヲ許サス

但遷官諸費ハ要需ノ節事由ヲ具シ内務大藏兩省へ伺出ヘシ

一 小科目流用ハ申出ニ及ハス

一 豫算帳ハ爾後申牒スルニ及ハス尤小科目ヲ區分シタル仕譯書ヲ調製年々本廳豫算帳ト共

ニ大藏省へ差出スヘシ

○第貳節 官國幣社需用用品官費社費區分

第千四百三十七

明治十年四月廿六日內務省乙第四拾六號

府達

別紙丁第六號之通官國幣社神官へ相達候條此旨相達候事

丁第六號

官國幣社神官

各社需用用品中官費社費之區分有之勿論ニ候處是迄別紙概目ノ如キ社費ニ屬スヘキ分ヲモ往々經費中ヨリ仕排候向有之不都合ニ候條自今一層精査ヲ加ヘ官費社費混淆無之様可致注意此旨相達候事

但別紙概目ノ外官費社費決兼候分ハ可伺出事

別紙

社費概目

○私祭ノ神饌幣帛料及樂人人夫雇料○神輿修復費○攝末社日供神饌費及下番給○賽錢箱并守札調製費○國史敎典并新聞紙買入代○社頭備置祭服并宿直所用膳碗飯櫃調製代○説教所用器品調製費并教導筋ニ付テノ使夫郵便稅等

○第三節 從軍徇難ノ者墳墓及招魂社經費

第千四百三十八

明治八年四月廿四日第六拾七號

使府達

戊辰己巳ノ際從軍徇難ノ者各所戰没ノ地等ニ有之墳墓及ヒ招魂社ノ經費左ノ通相定候條此旨相達候事

但金額半ケ年分宛大藏省ヨリ受取毎三ヶ月勘定帳同省へ可差出事

招魂社經費并墳墓修繕費定額

一金三拾五圓

一ケ年一社定額

金拾圓

祭祀料

但神饌料ハ每壹人別ニ金貳拾五錢宛ヲ給ス

金貳拾五圓

修繕費

但掃除夫等ノ費用モ此内ヨリ支給スヘシ

一金六圓貳拾五錢

一所墳墓修繕費定額

但一境域中ハ各所ニ埋葬ストモ渾テ一所ト見做ス

第千四百二十九

明治八年八月十五日大藏省乙第百拾壹號達

本年四第第六十七號公達各所戰没ノ地等ニ有之墳墓及招魂社經費ハ定額ヲ以悉皆可仕贖等ニ付漏餘有之候トモ還納ニ不及該廳へ積置不足ヲ補ヒ又ハ追年ノ修繕費ニ充可申此旨相達候事

第千四百四十

明治九年十二月十三日

內務省乙第百四號

府達

招魂社費ノ内祭祀料神饌料供方ノ儀是迄區々ニ涉リ候儀モ有之候處右ハ一年一度祭典執行ノ當日ノニ相供候儀ト可相心得尤明細表ノ儀ハ別紙雛形ノ通調製候様可致且右經費ノ内兩費ハ祭典ノ該季節一時請求候儀ト可相心得此旨相達候事

第三部 第四編 第五章 第二款 第貳節 第三節

別紙

明治何年自何月迄祭祀料明細表

招魂社費之部

合金

内譯

主任官姓名印

諸	雇	人	員	一人ノ	賃小	計
何	足	何	人	金	金	
々						

通計金

是ハ祭典ニ付雇上候人足其他ノ備給ヲ掲載ス

品	目	數	量	代價小計
半	紙	何	帖	金
蠟	燭	何	挺	金

何	々	何	程	金
品	目	數	量	代價小計
神	酒	何	程	金
洗	米	全	金	
何	々	全	金	

通計金

是ハ同上需用ノ品目ヲ掲出ス

明治何年自何月迄神饌料明細表

招魂社費之部

合金

内譯

主任官姓名印

品	目	數	量	代價小計
神	酒	何	程	金
洗	米	全	金	
何	々	全	金	

是ハ全ク神饌供物ノ品目ヲ掲載ス

○第四款 給與

第三部 第四編 第五章 第四款

○第壹節 郡區長給料旅費滿年賜金其他諸給與

第千四百四十一 明治十六年二月廿一日第七號布告

郡區長ノ給料及旅費ハ來ル十六年度以後國庫ヨリ支辨ス

右奉 勅旨布告候事

第千四百四十二 明治十六年三月三日內務省乙第九號縣府へ達

今般第七號布告ニ付テハ郡區長ニ屬スル滿年賜金其他ノ諸給與共渾テ國庫ヨリ支辨ノ筈ニ候條此旨相達候事

○第貳節 府縣判任官以下月給定額

第千四百四十三 明治九年一月三十一日第九號附港場有へ達

判任官月給定額は迄舊草高ヲ以相定置候處右ハ相感シ更ニ反別人口ニ基キ左ノ通相定候條本月ヨリ施行可致此旨相達候事

但從前定額外増員許可ノ分ハ悉皆廢止ノ儀ト可心得事

判任官月給割賦規則

反別四萬町

人口四十萬人

人員六拾六人ノ目安

但壹人三拾圓ノ割

此金千九百八十圓

一官員ヲ定ムル耕地宅地反別四萬千町以上八萬町迄ハ四千町ニ壹員ヲ増八萬千町以上ハ都

十七年三十一日
公達(千四
百四十七)ヲ
以テ規則第廿
二條削除ニ付
湖年賜金ノ廉
ハ消滅ス

八年內(第六
十四號)百八
十一)ヲ以テ
單務課ヲ置キ
十二等官三名
増置ス

テ六千町ニ壹員ヲ増四萬町未滿ハ四千町ニ壹員ヲ減ス九年第三十三號公達ヲ以テ

一人口四拾壹萬人以上八拾萬人迄ハ二萬人ニ壹員ヲ増八拾壹萬人以上ハ都テ二萬人ニ壹員

ヲ増四拾萬人未滿ハ貳萬人ニ壹員ヲ減ス

一官員増減ハ前ノ目安ニ依リ壹人三拾圓ヲ以算定スベシ

一官員増減ノ法反別ハ町位人口ハ十位未滿則拾前目安ニ依リ壹員ニ滿タサルモノハ四拾五

入ノ法ヲ以其數ヲ定ムヘシ

一右人員ハ月給金額ヲ定ムルノ目安ニ付本額金ノ内ヲ以等級ニ依リ人員ヲ増減シ或ハ等外

吏御用掛無等出仕及雇抱寫字人等申付ルハ主務ノ適宜タルヘシ

但事務多端等ニテ勉勵ノ者手當等モ本額金ノ内ヲ以支給スヘシ

仕丁

四員

仕丁ハ反別人口ノ多寡ニ拘ハラズ定員ノ通タルヘシ最モ支廳アレハ一支廳毎ニ貳員ヲ置

キ若シカラサル事十年第三號公達ニ依

第千四百四十四 明治九年八月九日第七拾九號附港場有へ達

本年一第九號ヲ以判任官月給定額反別人口ニ基キ改定候旨相達置候處右反別ノ儀ハ當分舊反別ヲ以判任官人員相定候儀ト可心得此旨相達候事

第千四百四十五 明治十二年二月二十八日第拾六號縣府へ達

衛生事務ノ儀ハ追々相達候趣モ有之漸次擴張可致就テハ本年一月ヨリ左ノ通判任官増員候條此旨相達候事

東京府 京都府 大坂府
神奈川縣 兵庫縣 長崎縣
新潟縣

一判任官七名宛 (壹名金三十拾圓此月計金貳百拾圓)
此俸給年計金貳千五百貳拾圓宛

埼玉縣 群馬縣 千葉縣
茨城縣 栃木縣 塚縣
三重縣 愛知縣 靜岡縣
山梨縣 滋賀縣 岐阜縣
長野縣 宮城縣 福島縣
岩手縣 青森縣 山形縣
秋田縣 石川縣 島根縣
岡山縣 廣島縣 山口縣
和歌山縣 愛媛縣 高知縣
福岡縣 大分縣 熊本縣
鹿兒島縣 沖繩縣

一判任官五名宛 (壹名金三十拾圓此月計金百五十拾圓)
此俸給年計金千八百圓宛

第千四百四十六 明治十六年一月廿三日第貳號府縣(札幌根室沖)細ノ三縣ヲ除ク陸海軍兵事ニ關スル事務取扱ノ爲メ自今兵事課ヲ置キ俸給トシテ年額金六百圓増加候條判

任官適宜増員可致此旨相達候事

第三節 月俸規則

第千四百四十七 明治七年五月十日第六拾壹號院省使へ達月俸規則別冊ノ通相定候條此旨相達候事

別冊

月俸規則

第一條 諸官員月俸ハ毎月十七日支給スルヲ定規トス

但シ免職病死旅行其他非常ノ事故アル時ハ此限ニアラス

第二條 月俸ハ一月ヲ前後ニ分チ新任十五日前ニ在ル者ハ其全額ヲ給シ十六日後ハ半額ヲ給ス昇等増給モ亦之ニ準ス降等及ヒ免職十五日前ニ在ル者ハ猶舊等ノ俸半額ヲ給シ十六

日後ハ其全額ヲ給スヘシ

但免職ノ者其擔當セシ事務引渡シニ付時日ヲ要スルモ別ニ俸ヲ給セス尤モ更ニ引渡事

務ヲ命スル者又ハ後日調査等ノ爲メ出應ヲ命スル者ノ如キハ此限ニアラス

新任ノ者宣旨拜受書差出置仕セサル内辭表差出スモノハ月俸一切給セサルヘシ十五
十九號公達ヲ以
テ本項ヲ追加ス

第三條 上下半月内ニ免職更ニ任官ノモノハ前官ノ俸ハ第二條免職ノ例ニ據リ後官ノ俸ハ同條新任ノ例ニ據リ支給スヘシ十一年第二號公達ヲ以テ本條ヲ改正シ十二年第四十九號公達ヲ以テ全條改正

第四條 一月内再三轉任スル者ハ月俸支給ノ定日在職ノ廳ニ於テ十五日前後ノ區分ヲ以テ通算シ其官相當ノ俸ヲ給ス若シ十八日後轉任昇等ノ者ハ新任ノ廳ニ於テ其増額ヲ給スヘシ

但シ武官月俸ハ日割ヲ以テ給ス故ニ武官ヨリ文官ニ轉任スルキハ總テ其月ハ月給同様に見做シ十五日前後ヲ以テ區分シ其多キ方ニ因テ之ヲ給ス右ノ外日給ヨリ月給ニ轉シ月給ヨリ日給ニ轉スルノ如キハ總テ此例ニ準スヘシ

第五條 外國並ニ内國トモ遠隔ノ地ニ在留ノ者轉任黜陟スルキハ宣旨其地ニ達シ當人受書ヲ出シタル日ヲ推シ十五日前後ノ區分ヲ以テ本官ノ月俸ヲ給シ又ハ給セサルヘシ

第六條 數官ヲ兼任ノ者ハ月俸ノ多キ方ニ就キ其廳ニ於テ之ヲ給シ同等ノ兼任ハ本務ノ廳ニ於テ之ヲ給ス兼任ノ月俸ハ別ニ給セサルヘシ

但文武官兼任ノ者ハ文官月俸ノ内祿稅ヲ除キ武官ノ俸給ニ比較シ其多キ方ヲ以テ支給スヘシ十年第八十號公達ヲ以テ但書ニ項ヲ追加ス作業ニ關スル者ニ限り月俸ハ現ニ勤務スル所ノ廳ヨリ支給スヘシ第十一條モ亦之ニ準ス

第七條 他所出張又ハ在勸命セラレ其地ニ於テ月俸支給スヘカラサル者ハ公務ノ長短ヲ量リ發程ノ節月俸三ヶ月迄ハ繰上ケ支給スルモ妨ケナシトス三ヶ月ヲ經テ仍ホ滞在ヲ要ス

ルキハ亦右例ニ隨テ送致スヘシ

第八條 外國出張ノ者ハ發程ノ節月俸六ヶ月マテハ繰上ケ支給スルモ妨ケナシトス六ヶ月ヲ過テ猶ホ在留スヘキキハ亦右例ニ隨テ送致スヘシ

但六ヶ月ヲ過キ猶在留スル者留守宅ニ於テ受取ント欲スル者ハ名代人ヲ定メ發程前其旨申立置ヘシ九年第七十號公達ヲ以テ但書ニ項ヲ追加ス在留中免職ノ者ハ其月十五日前後ノ區分ヲ以テ計算シ過給ノ分ヲ返納セシム第七條モ亦同シ

第九條 公使領事書記官書記生等ハ轉任及同官ヨリ他ニ轉任スルキハ月ノ十五日前後ニ拘ハラズ月俸ハ其月ノ日數ニ分割シ轉任前日迄前官廳轉任當日ヨリ後官廳ニ於テ支給スヘシ尤公使領事書記官書記生等ヲ拜命シ出發前他ニ轉任スル者ハ十五日前後ノ區分ヲ以テ

後官相當ノ月俸ヲ後官廳ニ於テ支給スヘシ九年第七十號公達ヲ以テ全條ヲ改正シ十年第七號公達ヲ以テ更ニ全條ヲ改正ス第十條 轉任ニ就キ前官ニテ擔當セシ事務引渡シノ爲メ時日ヲ經未タ當官ノ事務ニ着手セサルモ月俸ハ當官ヲ以テシ新任ノ廳ニ於テ給スヘシ

第十一條 公事ノ便宜ニ因リ雙方示談ノ上甲廳ノ官員ヲ乙廳へ借用スルコトアルモ其月俸ハ甲廳ヨリ給スヘシ

第十二條 廢廳廢官ノ節遠隔ノ地ニ在勤又ハ出張ノ者ハ違書拜承私事旅行ノ者ハ迄在官ト同視ス尤引渡事務ヲ命スル者ハ仍ホ舊官ノ俸ヲ給ス十年第八十號公達ヲ以テ全條ヲ改正ス但引渡事務取扱中官等給額ヲ改正スルコトアレハ比較シテ其寡額ヲ給ス第十二條第十四

條モ亦之ニ準ス

内外國派出ノ者廢官ノ節復命ノ爲メ歸朝セシムルキハ引渡事務取扱ノ例ニ準ス

第十三條 免職ノ者事務引渡シ濟ノ後在職中ノ事件ニ付更ニ出廳ヲ命スルキハ舊官俸給半額日割ヲ以テ之ヲ給スヘシ

但シ在職中自己不正ノ事件ニ付キ出廳セシムルキハ給セサルヘシ

第十四條 免職ノ上御用滞在ヲ命スル者ハ滞在手當トシテ舊官月俸三分ノ一ヲ給ス

但シ右手當ハ上半月内免職ノ者ハ下半月ヨリ之ヲ給シ下半月内免職ノ者ハ翌月ヨリ之ヲ給ス滞在中再任上半月内ニアル者ハ其月分ヲ給セス下半月内ニアル者ハ中半月分ヲ給シ下半月分ハ給セサルヘシ

第十五條 許可ヲ得テ歸郷スル者ハ休暇中月俸半額ヲ給スヘシ

但シ計算方法譬ヘハ十五日前奉職地ヲ發足スル者ハ下半月分ヨリ減給シ十六日後發足スル者ハ翌月ヨリ減給スヘシ

歸郷中時宜ニヨリ公務ヲ命スルキハ奉務中月俸全額ヲ給スヘシ

但其日數ハ給暇中ニ算入セス且ツ已ムヲ得サル事故アリテ延期追願シ許可ヲ得ル者モ亦本條ノ通タルヘシ尤計算方法ハ前條ニ準據ス

公事旅行中(赴任及並旅行ノ如キ)許可ヲ得テ歸郷スル者公事旅行日積(在所ト御用先里路)中ハ月俸ヲ減スルコトナシ若シ日積ヲ超過スレハ其日ヨリ前項ノ區分ニ據リ支給スヘシ^{第十一年第四十三號公達}ヲ以テ本項ヲ追加ス

第十六條 病氣引ノ者ハ四ヶ月ノ間月俸全額ヲ給シ其後ハ三分ノ一ヲ給スヘシ

但病氣引十五日ニ至ラハ必ス醫案ヲ副ヘ届ケ出猶ホ在再數月ニ暨フキハ六十日毎ニ更ニ其病狀ヲ届ケ出ヘシ病氣引日數ハ引籠ノ日ヨリ起算スヘシ

若シ醫案ニ因リ奉職ノ地ヲ離レ郷里又ハ他方ニテ治療セント欲スル者ハ病症ノ輕重ニ從ヒ療養ノ日限ヲ定メ願出スヘシ尤モ許可日限滿チ未タ全癒ニ至ラサルキハ更ニ其狀ヲ具シ延期ヲ追願スヘシ此場合ニ於テハ奉職地出發前後ノ日數ヲ合算シ本條ニ據テ給スヘシ

歸郷中發病續キテ療養セント欲スル者ハ右同様上請スヘシ此場合ニ於テハ其月俸仍ホ第十五條ノ通り給スヘシ尤モ歸郷許可ノ日限ヲ除キ四ヶ月以上ニ及フキハ本官月俸三分ノ一タルヘシ

右病氣引四ヶ月計算ノ方法譬ヘハ十五日前引籠ノ者ハ下半月ヨリ之ヲ算シ十六日後引籠ノ者ハ翌月ヨリ之ヲ算スヘシ

第十七條 奉職ノ地ニ於テ父母病氣看護ノ爲メ休暇ヲ與フル者ハ第十六條ニ準ス

第十八條 官吏職務上ノ事件ニ關シ訴訟ノ原告人又ハ證人引合人トナリ審判中ハ月俸全額ヲ給ス其自己ニ關スル訴訟ノ原告人又ハ證人引合人トナリ欲勤ヲ爲ス者或ハ事故アリテ出仕差止ル者ハ其月十五日前後ヲ區別シ減シテ五分ノ一ヲ給ス^{十六年第五十四號公達ヲ以テ修正}第十九條 忌引中ハ月俸全額ヲ給シ且ツ父母忌中墓參ノ爲メ歸郷ヲ請フ者ハ其忌日限中ハ同ク之ヲ給シ其餘ノ日數ハ十五日前後ノ區分ヲ以テ第十五條ノ通りタルヘシ

但歸郷給暇中父母ノ喪ニ遭フ者モ本條ニ據ルヘシ（第七年第八十三號公達ヲ以テ第十五條ヲ（本條）ト訂正ス）第二十條 各廳ノ適宜ニ因テ御用掛無等ノ出仕或ハ雇抱并書記等ノ名義ヲ以テ出仕セシムルモノ其他巡卒門番等給料ノ多寡ニ不拘月給ノ者ハ總テ前各條ニ準據スヘシ（八年第四十條改正）

第二十二條 同上ノ内日給ノ者及ヒ小使諸職人其他小者ノ類ハ給料ノ多寡ニ不拘雇入并放免等ノ月端日數ハ總テ日割ヲ以テ給與スヘシ（全）

附錄 明治十三年三月三十日會計檢査院第貳號院令

月俸規則第二十一條日給ノモノ任免等ノ節端日數日割ヲ以テ支給スヘキモノハ從前一日當リノ金算ヲ算出シ之レニ勤日數ヲ乘スルノ算則ニ候處自今其月給額ニ勤日數ヲ乘シ而シテ該月ノ全日數ヲ以テ之レヲ除スルノ算則ヲ用ヒ日割給與ノ金額ヲ定ムル義ト可心得此旨相達候事

○明治八年六月三十日第百拾四號院省使へ達

各廳雇出仕等日給ノ者是迄一六并祝日祭日其他一般休暇日ニ其給額ヲ與ヘ或ハ不與等一定無之候處本年七月一日ヨリ以後ハ日數ヲ限リ雇入ノ者又ハ諸職人等ヲ除クノ外ハ都テ右休暇日ト雖モ給額可相渡此旨相達候事

第二十二條 八年第六拾六號公達ヲ以テ追加シ十年第二號公達ヲ以テ但書二項ヲ追加シ七年第五號公達ヲ以テ本條ヲ廢シ又更ニ本條ヲ追加シ同第三十六號公達ヲ以テ再ヒ本條ヲ廢ス

第二十三條 等外吏奉職滿五年以上ニシテ死去又ハ退官シタルトキハ其月俸半額ヲ以テ奉

職年數ノ一個年ニ當テ勸績年數ニ應スルノ金額ヲ一時限リ支給ス可シ但犯罪若クハ懲戒ニ因リ免官ノ者ハ之ヲ支給セス（十七年第五號公達ヲ以テ本條ヲ追加ス）

○第四節 旅費定則

第千四百四十八 明治九年六月十三日第六拾四號院省使へ達

明治五年（十）第三百九號旅費定則及爾後追々改正增加ノ分共本年六月三十日限り相廢シ更ニ別冊ノ通相定七月一日ヨリ施行候條此旨相達候事

別冊

旅費定則

內國之部

第一章 陸路水路トモ渾テ旅中一切ノ費用トシテ表面ノ通旅費日當ヲ支給ス可シ

第二章 陸路旅費ヲ三分シ並旅行赴任旅行晝夜急行トナシ各一日十里計ヲ以テ表面ノ日當ヲ支給ス可シ（十里以上ノ端里數滿一里以上ハ日當ヲ支給ス可シ）

第一項 並旅行ハ該廳ヨリ片道六里以上ヨリ之ヲ給ス（片道六里未滿ハ第四項ニ準ス）
第二項 赴任旅行ハ在勤所ノ常務ニ服スルヲ云及新任轉任ノ節該廳ヘ三里以上ヨリ三里未滿ハ之ヲ給ス尤新任ノ者ハ第十七章ノ相當ヲ以テ支給ス（新任轉任ノ者旅費ノ官廳ヨリ返付ス可シ但甲種ノ官吏ヲ七廳ヘ借用スルノ類モ七廳ニ於テ給ス）
第三項 晝夜急行行スルヲ云（急行ノ日當ヲ給ス一日或ハ半日間急行スルモ亦全シ）

第四項 該廳ヨリ片道六里未滿ノ旅行ハ總テ出張巡回ニ近方派出トシ片道三里未滿

ニシテ日歸ナレハ日當ヲ給セス一泊スレハ滞留日當ヲ給シ片道三里以上六里未滿

ハ日歸一泊ノ別ナク往返ニテ並旅行日當一日分ヲ給シ滞在スレハ滞留日當ヲ給ス

第五項 出張先滞在中片道三里以上ノ地へ派出ノ節ハ第四項ニ準シ並旅行ノ日當ヲ

給ス尤三里未滿ノ地へ同斷ノ節ハ第三章滞留日當ノ外一切給與セス事業中縦横奔走

第六項 行旅中渡海ニ非ラサレハ至リ難キ場所ハ陸路ノ割合ヲ以テ赴任旅行ハ該日

當ヲ給シ其他ハ並旅行日當ヲ給ス尤官船乗組渡海ノ節ハ第四章ニ準ス十二年第四

項改正

第七項 巡回險田測量其他巡回日數ニ應シ里程ハ並旅行日當ヲ給ス但シ近方派

出ハ第四項ニ準シ滞在ノ節ハ第三章ニ準ス

第八項 十里外ヨリ始ル巡回及ヒ此地ヨリ彼地へ移ルトキ十里以上ノ場所ハ本章ニ

準シ並旅行日當ヲ給シ即日巡回スルトモ其日ハ別ニ日當ヲ給セス尤十里未滿ハ第

七項ニ準シ日數ヲ以テ給ス

第九項 測量或ハ堤防等ノ事業ニテ巡回滞在中旅宿ヨリ其測量等ノ場所へ日々派出

スルモ日歸ナレハ里程ニ別ニ旅費ヲ給セス滞留日當ノミヲ給ス一泊以上ハ里程ニ

準ス

第十項 並旅行ハ一日拾里詰ト定ムルト雖モ御用柄ニヨリ百里ノ行程ヲ十二三日ニ

旅行スルカ如キ事實不得止節ハ右増日數ニ應シ表面ノ通滞留日當ヲ給スヘシ

第十一項 地方出張ノ者甲乙丙ノ各地へ兼行スルハ都テ本廳ヨリ丙地迄ノ片道里

程ヲ通算シ途中尙各地へ立寄トモ別段區分セス丙地迄ノ里程へ合算シ十里詰ノ割

ヲ以テ旅費日當支給スヘシ以上二項ハ九年第一百

第十二項 各廳及ヒ支廳又ハ出張所ニ於テ三里以上ノ地ヨリ採用シ該廳在勤ヲ命セ

ス一時滞留セシメ追テ任所へ赴ク者ハ本人原住ノ地ヨリ滞留ノ地迄ハ第十七章相

當ノ赴任旅費ヲ給シ夫ヨリ任所迄ハ直路里程ニ應シ官等相當ノ赴任旅費ヲ給シ滞

留中ハ拜命前後ヲ區分シテ滞留日當ヲ給ス其二里以内ノ地ヨリ採用セシ者ハ滞留

地ヨリ任所迄前同様赴任旅費ノミヲ給スヘシ但官ノ都合ニ因リ支廳又ハ出張所ノ

近傍へ特ニ止宿セシムル時ハ滞留日當ヲ給ス十年第五十五號公達

他方出張本廳ヨリ支廳へ臨時出張支廳在勤ハ着翌日ヨリ滞留日當ヲ支給ス可シ

第一項 晝夜急行或ハ便給等ニテ陸路日積ヨリ早着スルトモ本章ニ準シ滞留日當ヲ

給ス

第二項 行旅中川留雪支或ハ病氣等ニテ延滞セシ向ハ増日數ノ分滞留日當ヲ給ス但

シ川留雪支ハ其所戸長ノ証書病氣ハ醫師ノ診察書ヲ差出ス可シ

第三項 出張先病氣ニテ許可ヲ得事務半途ニシテ本廳へ歸ル者ハ旅費ヲ給シ重症ニ

テ一時其地ニ滞在ヲ乞フ者ハ醫師ノ診察書ヲ以テ願出レハ滞留日當及歸廳ノ節ハ

旅費ヲ給ス

第四項 三里以上ノ地ヨリ採用ノ向ハ着翌日ヨリ拜命ノ前日マテ第十七章ノ相當ヲ以テ滯留日當ヲ給ス

第五項 歸省或ハ養病ニテ他所滯在中轉任ノ者ハ其滯在地ヨリ新任廳マテノ旅費ヲ給シ滯在地ヨリ前官廳マテノ旅費ハ給セズ

第四章 官船或ハ各廳ノ備給等ニテ國內航海並海路巡回ハ日數ニ應シ日當及ヒ賄料ヲ支給ス可シ

第一項 官費ヲ以テ任賄ノ節ハ旅費ノ等級一二等ニ該ル者ハ主從ヲ合セテ上等壹人下等貳人同三等ハ上等壹人下等壹人マテ現員ヲ以テ賄ヒ全四等ハ上等全五等ハ中等ハ下等給仕小使諸職人等ハ下等各壹人ノ割ヲ以テ任賄ヲ可シ故ニ本章ノ賄料ハ給與セズ

第二項 各廳ノ便宜ニヨリ便船乘組渡海ヲ命スル節船賃ハ旅費ノ等級一等ヨリ四等マテハ上等全五等ハ中等但シ中等無之ハ五等ヲ下等トス悉皆官費ヲ以テシ別ニ本章ニ準シ乘組日當ヲ給ス尤從者召連ル節旅費ノ等級一二等ハ下等貳人全三等ハ下等壹人ノ船賃ノミヲ支給ス自己ノ便立ニヨリ乘船スル向ハ本項ノ例ニアラス

第五章 東京横濱及ヒ京都大坂神戸間ノ瀛車賃ハ表面ノ通支給シ時ニヨリ一日間ニ往來シ又ハ二日ニ往來スルトモ日數ニ應シ別ニ賄料トシテ滯留日當ノ額ヲ給ス若シ到着ノ上滯留アラハ第三章ニ準據スヘシ九年第十三號公達ヲ以テ(及ヒ)ノ下(京都)ノ二字ヲ加フ

第一項 京都ヨリ神戸ニ至ル瀛車ハ一線路ニ付滯留日當ハ本章ニ準シ支給スヘシ

第二項 赴任ノ者ハ表面赴任瀛車賃及ヒ賄料トシテ滯留日當ノ額ヲ支給ス十七年第九號公達ヲ以テ(赴任)ノ下(及免職)ノ五字ヲ刪ル

第三項 東京横濱並京都大坂神戸間ノ線路中間ノ「ステーション」ヘ東京ヨリ神奈川迄大坂ヨリ西ノ宮送京都ヨリ行旅スルモ赴任ハ陸路三里以上ヨリ並旅行ハ片道六里以上ヨリ本茨木迄ノ類章ニ準シ六里未滿ハ第二章第四項ニ準シ往返ニテ表面瀛車賃及ヒ滯留日當一箇ヲ給ス尤下車ノ上陸路一里以上經過スルモノハ此例ニアラス以上三項ハ九年第九號公達ヲ以テ増補

第六章 使府縣管內旅行ハ表面ノ通旅費日當ヲ支給ス可シ

第一項 管內旅行ノ節道路ノ便宜ニヨリ他ノ管轄地ヲ通過スルノ類モ管內ニ準ス尤管內ト雖トモ支廳等ヘ在勤並管外派出其他晝夜急行及ヒ任免轉任ノ節旅費等ハ總テ管外ニ準シテ之ヲ給ス

第二項 各廳ノ官員本廳支廳ヲ論セズ其在勤地府縣ノ管內旅行ノ節ハ本章ニ準據ス神官及薩士族平民等管內旅行ノ節モ亦全シ其部外ハ本章ニ準シ

第三項 開拓使管內ハ本廳支廳各其所管ノ部内ヲ以テ管內トシ其部外トス本章ニ準シテ旅費ヲ給ス

附錄 明治十五年六月二十四日大藏省第貳拾號府令 達
管内外御用ヲ兼派出スル者旅費ノ儀自今管外ニ向テ出發ノ地ヨリ管內ニ御用アル地ヘ到着迄ヲ以テ管内外ヲ區分支給シ派出中更ニ管内外御用者亦同シ其旅費支給計算方ハ旅費定則第十五章ニ據ル儀ト可相心得此旨相達候事

第七章 他方在勤ノ者免職ノ節復命セシムル時ハ其地ヨリ復命スル地迄ハ前官相當ノ旅費ヲ給ス
十七年第六號公達ヲ以テ改正

第八章 神官ハ總テ左ノ等級ヲ以テ支給ス可シ
十一年第三號公達ヲ以テ改正
旅費等級

神宮祭主

三等

神宮々司

四等

國幣 大社宮司

國幣 中社宮司

別格 小社宮司

國幣 小社

國幣 大社禰宜

神宮主典

國幣 中社禰宜

別格 小社禰宜

國幣 小社

神宮々掌

五等

十六年第五十
六號公達ヲ以
テ小社及別格
官幣社宮司從
前官幣社宮司
ニ改ムルヲ四
等ニ

國幣 大社主典

國幣 中社主典

別格 小社主典

第一項 神官ヨリ教導職兼務教導職ヨリ神官兼務ヲ命シ或ハ免スル節旅費ハ總テ神官相當ノ額ヲ給ス尤說教ノ爲メ各地方へ出張ノ旅費ハ一切之ヲ給セス

第二項 十年第八十一號公達ヲ以テ刪除
附錄 明治六年七月二十日教部省番外官國幣社宮司へ達

一社神官自今當省ヨリ御用筋ヲ以呼出候歟又ハ社用ニ付願濟ノ上出京致候外ハ社用申立上京候共旅費日當渡方難相成候條此旨可相心得候事
八年甲第八號及達書第廿二號省達ヲ以テ但書ヲ除ク

○明治十年七月二十日内務省丁第拾號神宮并官國幣社宮司へ達
各社神官社用ヲ以テ管内旅行ノ儀ハ其地方廳ヨリノ呼出ヲ受クルカ又ハ緊要ナル事務ニ付同廳ノ許可ヲ得テ往返スル者ノ外旅費日當共官費支給不相成筋ニ候條此旨相達候事
但非常ノ事故相生シ許可ヲ受クルノ時間無之場合ニ因リ出廳ノ節ハ別段ノ儀ト可心得事

得事

府 縣

乙第六拾七號

別紙丁第拾號ヲ以テ神宮并官國幣社神官へ相達候條此旨爲心得相達候事

○明治十五年四月二十六日內務省乙第貳拾七號官國幣社アル府縣社へ達
官國幣社神官東京府下ヨリ各地方へ赴任又ハ歸郷スル旅費從來當省ヨリ支給シ來候處
本年三月二十九日以降相廢シ總テ其神社ノ經費ヨリ支辨可爲致候條其旨相心得神社へ
通達可致此旨相達候事

第九章 御用掛准委任 准外任ハ各其本官ニ準シテ支給シ無等ノ出仕又ハ術業其他備抱等ノ名義ヲ
以テ出仕セシムル者ハ月俸金額ノ多寡ヲ以テ左ノ通支給スヘシ十七年第六號公達ヲ以テ
文中ヲ改正シ同第十九號
ヲ以テ本文
全ク改正ス
月俸金額

- 三百五十圓以上 四等
- 三百五十圓未滿三十圓迄 五等
- 三十圓未滿

第一項 日給ハ三十日分ヲ積算シ月俸同様見做シ本章ニ準據ス
第二項 該廳へ三里以外ノ地ヨリ呼寄セシ向ニ限り雇入ノ旅費ヲ給ス十七年第六號
公達ヲ以テ(雇
入)ノ下三字及(給ス)ノ
下四十六字ヲ別除ス
第十章 給仕小使諸職人ノ類破基丁獄丁左之通支辨ス可シ

- 六拾錢 並旅行日當
- 三拾錢 滯留日當
- 壹圓五拾錢 晝夜急行日當

三拾錢

五拾錢

六拾錢

官船渡海日當
全上賄料
東京横濱 間瀛車賃
大坂神戸 間瀛車賃
京都 間瀛車賃
大坂 間瀛車賃
第一項 諸職人等出張先ニテ其業ニ就キ相當ノ賃錢ヲ支給スル分ハ該地滯在中日當
ハ給セス

第十一章 外國人ニ附添旅行ノ節乘馬ヲ用ル時等外ハ旅費日當ノ外馬飼料一日六拾錢ヲ給
シ口附ノ者召連ル節ハ別ニ第十章ニ準シ旅費日當ヲ支給ス可シ

第一項 判任ハ馬飼料ヲ給セスト雖トモ口附ノ者召連ル節ハ第十章ニ準據ス
第十二章 官用荷物運搬費ハ勿論總テ現費支給ノ分ハ證書ヲ添へ詳細勘定書ヲ以テ申請ス
可シ證書之レナキ分ハ一切支給セサル可シ

第十三章 他方在勤或ハ出張ヲ命スル後其廳ノ都合ニヨリ免セシ者又ハ出發前死去ノ者ハ
片道里程三分一ノ旅費ヲ給シ巡回ハ見積リ總日數十里外ヨリ始ル巡回及ヒ此地ヨリ彼地
へ移ルルノ並旅行里程ハ日數ニ直シ算
スシ滯留日數
ハ算入セス六分一ノ旅費ヲ給ス尤願ニ因リ免シタルモノハ一切支給セサル可シ

第一項 並旅行ノ者出發後半途以內ヨリ呼戻セシ者ハ片道分ノ旅費ヲ給シ半途ヲ過
キ同様ノ者ハ其里程ニ應シ相當ノ旅費ヲ給ス
第二項 巡回ノ者出發後半途見積リ總日數四
分ノ一ヲ云フ以內ヨリ呼戻セシ節ハ見積リ總日數計
ニ同シ半數ノ旅費ヲ給シ半途ヲ過キ全樣ノ節ハ日數又ハ里數ニ應シ相當ノ旅費ヲ

第十四章 廢廳ノ節人撰ノ上事務引渡シヲ命シ旅行セシムル者ハ仍ホ舊官相當ノ旅費ヲ支給ス可シ

第一項 免職ノ者事務引渡濟ノ後在職中ノ事件ニ付更ニ出廳ヲ命スルトキハ第十七章ノ相當ヲ以テ給ス尤當時在職ノ者ハ其官相當ヲ以テ支給ス

第二項 往時奉職中ノ公務ニ付訴訟ノ被告人又ハ證人引合人トナリテ出廷スルトキモ第一項ニ準ス但刑事被告人トナルモノハ此限ニアラス十六年第五十四號公文改正

第十五章 並旅行ヨリ晝夜急行ニ轉スル如キハ總里數ヲ十里毎ニ區分シ其十里ノ内互ニ相跨ル里數ハ總テ旅費額ノ多キ方ヲ以テ支給スヘシ十里未滿ノ旅行モ亦之ニ準ス九年第百三十三號公文改正

第一項 一日ノ内陸路ヨリ官船等へ乗組又ハ上陸ノ節陸路片道一里以上ノ分ハ本章ニ準シ陸路ノ旅費日當ヲ給シ其日ノ乗組日當ハ之ヲ給セス餘之レニ準據ス附料モ船ニテ當日既ニ官費仕附ヒシ分ハ別ニ返償スルニ及ハス

第十六章 在官者ハ位勳ニ拘ハラズ總テ官等ニ據リ旅費ヲ給ス數官兼任ノ者ハ比較シテ各旅費ノ多キ方ニ從ヒ支給ス可シ十二年第四十三號公文達ヲ以テ(數官)ノ上廿三字ヲ増補ス

第十七章 華族及ヒ有位ノ士民公用ニテ旅行ノ節ハ旅費ノ四等ヲ以テ給シ無位ノ士民生徒僧侶等同斷ノ節ハ旅費ノ五等ヲ以テ支給ス可シ但別段ノ成規アル者ハ此限ニアラス同上但増補

第十八章 外國行ノ者發程并歸朝ノ節内地陸路通行ノ旅費ハ前各章ニ準シ國內ノ定規ヲ以テ支給ス可シ航海ノ都合ニヨリ内地陸路ノ節モ亦本章ニ準シ日當ヲ給ス

第十九章 歸省其他養病等許可ヲ得ル者ト雖モ私事ニ涉ル旅行ハ一切支給セサル可シ但公事旅行中(赴任及並旅行ノ如キ)歸省等ノ許可ヲ得テ迂路ヲ經ルト雖モ直路ノ旅費ヲ減スルヲナシ十一行定アルノ類

第二十章 各廳ノ便宜ニ依リ此定則ニ基キ適宜減少ノ方法ヲ設クルハ若シカラス

第二十一章 一百里外ヲ以テ本章ヲ追加ス

行幸行啓ノ節供奉ノ者へ支度料左ノ通支給スヘシ
太政大臣 金三百圓
左右大臣 金二百圓

一等官 金百五十圓

二等官 金百圓

奏任官 金五十圓

判任官 金十五圓

等外吏 但五十里外供奉ノ者へハ本文金額ノ三分ノ二ヲ給ス
一供奉ヲ命スル後其廳ノ都合ニヨリ免シタルモノ又ハ出發前死去ノ者ハ半額ヲ給ス

願ニ依リ免シタルモノハ之ヲ給セス十年第廿四號公達ヲ以テ以下二項ヲ追加ス
一 供奉出發後途中ニ於テ免セシ者又ハ死去セシ者ハ全額ヲ給スヘシ
外國ノ部

第一章 外國在勤又ハ出張ノ者ハ支度料日當表面ノ通り支給ス可シ

第一項 在勤又ハ出張中事務ノ都合ニ依リ一旦歸朝再ヒ出發シ又ハ外國ニ於テ此國ヨリ彼國ニ移轉スルモ別ニ支度料ヲ給セス尤御用濟歸朝ノ後更ニ在勤出張ヲ命スル節ハ此限ニアラス

第二項 日當ハ渡航ノ初日ヨリ内地へ歸着ノ日マテヲ通算シテ之ヲ給ス

第三項 在勤又ハ出張ヲ命スル後其應ノ都合ニヨリ免シタルモノ又ハ出發前死去ノ者ハ支度料半數ヲ給ス尤願ニ依リ免シタル者ハ之ヲ給セス

第四項 在勤又ハ出張先ニ於テ死去ノ節ハ該地ヨリ内地開港場マテハ第二章ニ照シ陸路旅費及船客料ノ額夫ヨリ郷里マテハ内國ノ部第七章ニ準シ手當トシテ之ヲ給ス十四年第一百十號公達本項追加

第二章 外國航海船客料並着船ノ港ヨリ出張或ハ在勤ノ都府マテ瀛車瀛船或ハ馬車賃其他私屬荷物運賃等表面ノ通定額又ハ概額ヲ以テ之ヲ給ス尤定額ハ過不足精算ニ及ハス概額ハ實費過不足ヲ精算スヘシ

第一項 陸路旅費ハ表面ノ通概額ヲ以テ給ス故ニ瀛車賃ハ判任以上上等外ハ中等其他諸費トモ右ニ準シ實費仕拂ヲナス可シ

第三章 外國出張中旅舎賄料ハ日數ニ應シ表面ノ通支給ス可シ

第一項 賄料ハ着港ノ日ヨリ給シ航海中ハ之ヲ給セス

第二項 航海中郵船ノ都合ニヨリ不得止上陸スルトキハ其日數ニ應シ賄料ヲ給ス
第四章 公用荷物運賃并本國其他へ公信郵便電信料公事交際ノ費用等ハ現場仕拂ノ高ヲ以テ官費トナス可シ

第五章 私屬ノ荷物運賃ハ勅奏判任壹人ニ付卅五貫目等外壹人ニ付貳拾貫目マテハ官費ヲ以テ之ヲ給シ其以上ハ自費タル可シ尤航海中ハ別ニ支給セサル可シ

第六章 官船或ハ各廳ノ備船等ニテ備航海スル者ハ船客料ヲ給セス内國旅費日當表官船渡海ノ賄料ヲ支給ス可シ

第一項 官費ヲ以テ仕賄ノ節ハ勅奏任ハ主從ヲ合セテ上等壹人下等壹人マテ現員ヲ以テ賄ヒ判任ハ上等外ハ中等中等ナキト其以下ハ下等各壹人ノ割ヲ以テ賄フ可シ

第七章 華族及士民等公用ニテ航海スルトキハ内國ノ部第十七章ニ照シ御用掛無等ノ出仕又ハ術業其他備抱等ノ名義ヲ以テ出仕セシムル者ハ同斷第九章ニ準シ内國旅費ノ三等ハ上四等ハ判任五等前各章ニ據リ支給ス可シ

第八章 諸職人小使ノ類支度料及渡航ノ初日ヨリ内地へ歸着ノ日マテ左ノ日當ヲ給シ其他船客料旅舎賄料瀛車賃ハ等外ニ準シ支給ス尤私屬荷物ノ運賃ハ別ニ給セサル可シ
拾貳圓五拾錢 支度料 拾八錢 日當

第三部 第四編 第五章 第四款 第四節

九年第百十三
號公達ヲ以テ
（横濱）トアル
場（内地開港
場）ト改ム

第三部 第四編 第五章 第四款 第四節

二百六十七

外 國		官 級		額 定		料 客 船	
等	判	奏	勅	任	官	額	定
外	任	任	任	任	級	額	定
至上海	至上海	至上海	至上海	至上海	至上海	至上海	至上海
至香港	至香港	至香港	至香港	至香港	至香港	至香港	至香港
至天津	至天津	至天津	至天津	至天津	至天津	至天津	至天津
至馬尼拉	至馬尼拉	至馬尼拉	至馬尼拉	至馬尼拉	至馬尼拉	至馬尼拉	至馬尼拉
至倫敦	至倫敦	至倫敦	至倫敦	至倫敦	至倫敦	至倫敦	至倫敦
至巴黎	至巴黎	至巴黎	至巴黎	至巴黎	至巴黎	至巴黎	至巴黎
至羅馬	至羅馬	至羅馬	至羅馬	至羅馬	至羅馬	至羅馬	至羅馬
至聖彼得堡	至聖彼得堡	至聖彼得堡	至聖彼得堡	至聖彼得堡	至聖彼得堡	至聖彼得堡	至聖彼得堡
至西貢	至西貢	至西貢	至西貢	至西貢	至西貢	至西貢	至西貢
至仰光	至仰光	至仰光	至仰光	至仰光	至仰光	至仰光	至仰光
至孟買	至孟買	至孟買	至孟買	至孟買	至孟買	至孟買	至孟買
至加爾各答	至加爾各答	至加爾各答	至加爾各答	至加爾各答	至加爾各答	至加爾各答	至加爾各答
至巴達維亞	至巴達維亞	至巴達維亞	至巴達維亞	至巴達維亞	至巴達維亞	至巴達維亞	至巴達維亞
至泗水	至泗水	至泗水	至泗水	至泗水	至泗水	至泗水	至泗水
至三寶壟	至三寶壟	至三寶壟	至三寶壟	至三寶壟	至三寶壟	至三寶壟	至三寶壟
至望加錫	至望加錫	至望加錫	至望加錫	至望加錫	至望加錫	至望加錫	至望加錫
至巨港	至巨港	至巨港	至巨港	至巨港	至巨港	至巨港	至巨港
至安南	至安南	至安南	至安南	至安南	至安南	至安南	至安南
至暹羅	至暹羅	至暹羅	至暹羅	至暹羅	至暹羅	至暹羅	至暹羅
至緬甸	至緬甸	至緬甸	至緬甸	至緬甸	至緬甸	至緬甸	至緬甸
至印度	至印度	至印度	至印度	至印度	至印度	至印度	至印度
至澳洲	至澳洲	至澳洲	至澳洲	至澳洲	至澳洲	至澳洲	至澳洲
至紐西蘭	至紐西蘭	至紐西蘭	至紐西蘭	至紐西蘭	至紐西蘭	至紐西蘭	至紐西蘭
至美國	至美國	至美國	至美國	至美國	至美國	至美國	至美國
至歐洲	至歐洲	至歐洲	至歐洲	至歐洲	至歐洲	至歐洲	至歐洲
至亞洲	至亞洲	至亞洲	至亞洲	至亞洲	至亞洲	至亞洲	至亞洲
至非洲	至非洲	至非洲	至非洲	至非洲	至非洲	至非洲	至非洲
至美洲	至美洲	至美洲	至美洲	至美洲	至美洲	至美洲	至美洲

表 當 日 費 旅 國 內

第九章 從者ハ願ニヨリ勅奏任官ニ限リ登人ヲ許可シ往返并在留國內外公川旅行ノ節船客料及瀛車賃行旅中賄料共等外ニ準シ支給スルト雖ヒ支度料日當滞在中賄料ハ總テ支給セサル可シ

第十章 全權大使等ノ如キ重大ノ御用ニテ出張ノ向並各國公使領事館在勤ノ者及朝鮮行船客料賄料等ハ此定則ノ外タル可シ

等 外	判 任	奏 任	勅 任		級 官
五 等	四 等	三 等	三 等	一 等	旅 費
五 等	四 等	三 等	二 等	一 等	並 旅 行
五金一圓	金三圓	金四圓	金七圓	金八圓	行 赴 任 旅
九金一圓	八金三圓	金五圓	八金八圓	金十圓	行 赴 任 旅
九金二圓	八金三圓	金五圓	八金八圓	金十圓	行 赴 任 旅
五金三十	錢七十	金一圓	金二圓	卅錢	滯 留
錢七十	五十錢	五十錢	金四圓	五十錢	官 船 渡
錢六十	錢九十	二十錢	五十錢	七十錢	同 賄 料
錢八十	六十錢	二十錢	八十錢	五十錢	府 縣 管
錢三十	錢五十	錢八十	五十錢	七十錢	滯 留
金九十錢	錢一圓五十	金二圓	金三圓	錢三圓五十	東 京 橫 濱 間 大 坂 神 戶 間 片 道 瀛 車 賃

內國旅費日當表追加九年第百十三號公達

二百六十六

旅費		勸	
陸路	水路	判任	勸任
概額	概額	一等	一等
至府里	至府里	金八十圓	金八十圓
至府里	至府里	金百三十圓	金百三十圓
至府里	至府里	金六十圓	金六十圓
至府里	至府里	金九十圓	金九十圓
至府里	至府里	金六十圓	金六十圓
至府里	至府里	金五十圓	金五十圓
至府里	至府里	金四十圓	金四十圓
至府里	至府里	金三十圓	金三十圓
至府里	至府里	金四十圓	金四十圓
至府里	至府里	金五十圓	金五十圓
至府里	至府里	金六十圓	金六十圓
至府里	至府里	金七十圓	金七十圓
至府里	至府里	金八十圓	金八十圓
至府里	至府里	金九十圓	金九十圓
至府里	至府里	金一百圓	金一百圓
至府里	至府里	金一百一十圓	金一百一十圓
至府里	至府里	金一百二十圓	金一百二十圓
至府里	至府里	金一百三十圓	金一百三十圓
至府里	至府里	金一百四十圓	金一百四十圓
至府里	至府里	金一百五十圓	金一百五十圓
至府里	至府里	金一百六十圓	金一百六十圓
至府里	至府里	金一百七十圓	金一百七十圓
至府里	至府里	金一百八十圓	金一百八十圓
至府里	至府里	金一百九十圓	金一百九十圓
至府里	至府里	金二百圓	金二百圓

第五節 諸官員公事旅行ノ者へ旅費操替貸渡

諸官員公事旅行中旅費欠乏ノ趣ヲ以テ其經過地ノ官廳へ繰替金ヲ要請スルモ該員ヨリ所屬ノ本廳へ請求シ其本廳ヨリノ照會ヲ得ルニ非レハ容易ニ貸與候儀不相成最モ盜難其他非常ノ災害ニ逢ヒ電信線ノ設置無之地方ニ於テ本廳へ郵便往復ノ日數モ相掛リ目下差問候モノ如キハ全ク一時支辨ノ爲メ豫備金ノ内ヨリ繰替貸與イタシ其旨直チニ該員所屬ノ本廳へ

通報シ回金ノ上戻入可取計此旨爲心得相違候事

第六節 人違ニテ捕縛及召喚セシモノニ係ル旅費日當

第千四百五十一 明治九年五月四日第六拾三號布告
 明治七年七月第七拾八號同年十一月第百二十七號同八年五月第七十四號布告及同七年七月第九十一號同年十一月第百五十八號達ヲ廢シ証人並無罪解放ノ者等ノ旅費支給方ノ儀今般更ニ左之通相定當五月十六日ヨリ施行候條此旨布告候事

一罪四ノ証人タルヘキト思量シ裁判官又ハ警察官吏ニ於テ呼出ヌ者探索上ニテ捕ニ就キ及呼出ヲ受テ無罪ニ歸スル者人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫スル等ニテ呼出シタル者各官廳出ス者モ有罪ト認メ呼出サル者へ附添テ命スル者往復並滯留中左ノ通支給スヘシ各官廳亦同シ有罪ト認メ呼出サル者へ附添テ命スル者往復並滯留中左ノ通支給スヘシ各官廳三十二號布告ヲ以テ(裁判官)ノ下六字ヲ增補シ(及)ノ下三字ヲ刪除ス

但推糾ノ爲メ手鎖繩付等ニテ護送及檻倉入箇中等官費ヲ以仕賄ノ時日ハ別ニ給セス

金五拾錢 旅費日當
 金三拾錢 滯留日當

一該廳ヨリ片道二里以上十里迄ハ旅費日當一日分ヲ給シ爾餘一日十里詰ヲ以テ往返共之ヲ給シ滯在中ハ其日數ニ應シ滯留日當ヲ給スヘシ十里以上ノ端里數一里ニ滿タサルハ切捨但片道二里以上滿五里迄ノ地ヲ一日間ニ往來スル日當ハ一日分ノ外給セス尤二里未

十七年內七第
 十八號達(六
 百十九)參看

滿ノ地ヨリ呼出セシモノハ辦當料金二錢五厘ヲ給ス九年第百七號布告ヲ以テ但書ヲ増補ス
一各裁判所及ヒ警察官吏ヨリ呼出ヲ受テ無罪ニ歸スルモノ人違又ハ官吏ノ其人名ヲ誤寫ス
ル等ニテ呼出タルモノ旅費ハ其呼出シタル廳ヨリ之ヲ給ス其他ハ總テ本管廳寄留ノモノ
轉廳ヨリ給スルニ付証人及附添ヲ命スル者等ノ如キハ問糾中ノ日數并ニ往復里程ヲ詳記
シ其裁判官ノ証印ヲ請ケ旅費請取方ヲ申請ス九年第百三十二號布告ヲ以テ各裁判所
加（其呼出タル）下（裁判所）及副註ヲ刪除シ（廳）ヲ加（又同年第百五十
一號布告ヲ以テ無罪ニ歸スルモノ）

第七節 外國派遣ノ官員及留學生等給料諸
手當等渡方

第千四百五十一 明治六年五月三十一日第百八拾五號諸省使へ達
各國在留公使領事書記官等年分ノ給料公館ノ雜費旅費及特派使節ノ月給其他官撰留學生學
資金並支度金ノ額洋銀ヲ以テ致支給來候處本年六月一日ヨリ新貨ニ改定シ洋銀百弗ニ付金
百圓ノ割合ヲ以テ總テ從前定額ノ通本位金貨ヲ本ニ立可相渡候條此旨相達候事
第千四百五十二 明治六年六月十九日第貳百拾七號達
外國派出ノ公使領事書記等御手當金並官撰留學生徒資金及ヒ棄兒養育幼老扶助米其外都テ
手當金穀ノ類全月未滿ノ分ハ來ル七月十日ヨリ本年第七十五號布告官員月給端日數ノ分渡
方規則同條改正候事
第千四百五十三 明治七年一月廿九日第拾五號諸省使へ達

外國派出我公使領事書記其外御手當金ノ儀明治六年六月第二十七號布告候處來ル三月一
日ヨリ官撰留學生ヲ除ノ外年額月額ヲ以支給候分ハ都テ六年十二月第四百十九號達書官員
月俸同條渡方可取計此旨相達候事

第千四百五十四 明治七年十一月廿八日第百五拾九號院省へ達
外國へ派遣ノ各廳官員便宜ニ依リ一時公使館在留書記官又ハ書記生ノ事務取扱候者ハ右取
扱中ハ日當膳料ハ不賜本人官等相當書記官書記生ノ月手當ヲ賜候條公使館ニ於テ支給可致
此旨相達候事

但月給ノ儀ハ本管廳ニ於テ支給勿論ニ候事
第千四百五十五 明治八年一月廿三日第拾三號院省へ達
外國派出公使領事書記官其外月手當支給ノ儀明治七年（一月）第十五號ヲ以相達候處右公使
領事館在勤ノ向ニ限リ同年七月以後發着ノ月端日數ハ日割ヲ以支給候條此旨更ニ相達候事
第千四百五十六 明治八年五月十日第拾七號院省へ達
外國派出公使領事書記官其外月手當ノ儀彼地着發ノ月端日數ハ日割ヲ以支給候旨本年一第
十三號ヲ以相達候處右ハ歐米派出ノ者ニ限候儀ト可心得此旨更ニ相達候事

第八節 交際費支給方

第千四百五十七 明治十六年九月六日大藏省第五拾七號警視廳へ達
交際費支給方ノ儀八月割ヲ以テ毎月交付シ且任免轉任等ノ月モ各其月割額ヲ給シ自然定額

不足ヲ生スル節ハ他ノ細科目ヨリ流用支辨候儀ト可相心得此旨相達候事

○第九節 官役人夫死傷手當規則及各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當内規

第千四百五十八 明治八年四月九日第五拾四號院省使府縣使へ達

官廳ノ諸工事ニ使役スル者其職事ノタメニ死傷候節ハ自今左ノ規則ニ照準シ處分可致此旨相達候事

但本文手當金ノ儀院省使廳ハ定額金ノ内ヨリ府縣ハ豫備金ノ内ヨリ繰替仕拂置追テ別途請取方大藏省へ可申出事

附錄 明治八年十一月十七日第百九拾七號院省使使廳へ達

本年^四第五十四號達但書中官役夫死傷手當ノ儀院省使廳ハ定額金ノ内ヨリ仕拂勘定相立候儀ニテ別途相渡候譯ニハ無之候條此旨相達候事

官役人夫死傷手當規則

第一條 凡ソ各廳ニ於テ工事ニ使役スル者死傷スル時ハ相當ノ手當ヲナスヘシ其傷痕ノ輕重ヲ分テ五等トス左ノ如シ

第一等 重傷死ニ至ル者

第二等 重傷死ニ至ラズト雖モ終身自用ヲ辨スル能ハサル者

第三等 自己ノ動作ヲ得ルト雖モ終身事業ヲ營ムコト能ハサル者

第四等 譬ヘ事業ヲ營ムコトヲ得ルト雖モ身體ヲ毀傷シテ舊ニ復スルコトヲ得サル者

第五等 身體ヲ毀傷スルト雖モ一時ノ治療ヲ以テ舊ニ復スルコトヲ得ル者

第二條 凡ソ死傷人アル時ハ其原由ト輕重トヲ檢察シ醫員ノ診斷証書ヲ審查シ表面ニ照シテ救助金ヲ與フヘシ

第三條 手當金ヲ分ツテ療養埋葬及ヒ遺族扶助ノ三種トス十年五十二號公達ヲ以本項及次項本文ヲ改正ス

一 一等傷ニ罹リ死スル者ハ療養料埋葬料ヲ給ス遺族扶助料ハ戶主ニシテ家族ナキ者及ヒ戶主ニアラスシテ妻子ナキ者ハ給セス尤死者戶主ニアラス且妻子ナキ者ト雖モ其死者ニ依リ活計ヲ營ミ來リタル遺族一戸籍内ニアレハ之ヲ給スヘシ在ルモノハ之ヲ給スヘシ

但即死シテ療治ニ掛ラサル者ヘハ療養料ヲ給セス但療養中全ク他病ノタメニ死スル者ヘハ扶助料ヲ給セス以下從前

一 二等三等四等傷ニ罹ル者ハ療養料扶助料ヲ給與スヘシ

一 五等傷ニ罹ル者ハ療養料ノミヲ給與スヘシ

第四條 傷痕ノ輕重ハ即時ニ確定シ難シト雖モ其實況ヲ見計ヒ即時ニ療養料ヲ給シ置キ治療ノ後醫員二名以上ノ診斷証書ト其容體トヲ審查シ相當ノ給與スヘシ

死傷手當表

扶助料	三拾圓	貳拾圓	拾圓	五圓	拾圓	圓
	一等傷	二等傷	三等傷	四等傷	五等傷	傷

埋葬料拾圓	同	上同	上同	上同	上
療養料	疵ノ輕重ニヨリ適度ヲ量テ給ス	同	上同	上同	上

第千四百五十九 明治十二年二月一日第四號官省院へ達

各廳技術工藝ノ者就業上死傷ノ節手當内規則紙ノ通相定候條自今右ニ照準施行可致此旨相達候事

但一般官員ト雖モ技術上死傷ノ節ハ本文ニ準シ候儀ト可相心得事

別紙

各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當内規

第一條 凡技術工藝ノ者就業上死傷ニ罹ル時ハ其原由并傷痕ノ輕重ヲ檢察シ醫員ノ診斷證書ヲ審査シ表面ニ照シテ手當金ヲ給スヘシ

第二條 傷痕ノ輕重ヲ分テ左ノ五等トス

- 一等 重傷死ニ至ル者
- 二等 重傷死ニ至ラズト雖モ終身不具トナリ自用ヲ辨スルコト能ハサル者
- 三等 自用ヲ辨シ得ルト雖モ終身事業ヲ營ムコト能ハサル者
- 四等 事業ヲ營ムコト得ルト雖モ身體ヲ毀傷シ醫ニ復スルコト得サル者
- 五等 身體ヲ毀傷スト雖モ一時治療ヲ施シ止マ其癩痕ヲ存スル迄ニテ其運用全ク廢ニ復スル者

第三條 手當金ヲ分ツテ療養埋葬及扶助料ノ三種トス

一等傷ニ罹ル者ハ療養料埋葬料ヲ給シ遺族ニ扶助料ヲ給ス尤遺族ハ死者ニヨリ生計ヲ營ミ來リタルモノ(一戸籍内)ニ限ルヘシ
但即死シテ療治ヲ施サハル者ハ療養料ヲ給セス且療養中他病ノタメニ死ル者ハ扶助料ヲ給セス

埋葬料ハ親戚ニ給ス親戚ナキハ同僚又ハ其所在戸長ニ下付シテ埋葬セシム

二等二等四等ノ傷痕ニ罹ル者ハ療養料扶助料ヲ給ス

五等ノ傷痕ニ罹ル者ハ療養料ノミヲ給ス

但身體ヲ毀傷シ醫ニ復スルノ見込アリト雖モ治療數月ニ涉リ職務ヲ免スル者ハ四等傷ニ準シ扶助料ヲ給ス尤療養料ハ免職翌日ヨリ之ヲ給セス

各廳技術工藝者就業上死傷手當内規表

給與事項	奏任判任等外		
	埋葬料	金百圓	金五拾圓
一等	族遺扶助料	金二百五拾圓	金百七拾五圓
二等	扶助料	金二百五拾圓	金百七拾五圓
三等	全	上金貳百五拾圓	金百貳拾五圓

四等全	上金百五拾圓金七拾五圓金四拾圓
五等	

一右ノ金高ハ表面ノ額ヲ最上限トシ實際ノ情狀ヲ酌量シテ支給ス

一療養料ハ總テ現費トス

一備名義ヲ以テ等内外官吏ノ事務ヲ取扱フ者ハ月俸三百五拾圓以上奏任ニ三百五拾圓未満三拾圓以上ハ判任ニ三拾圓未満ハ等外ニ進シ日給ノ者ハ其給三十日分ヲ積算シ月俸ニ見做シ本文ノ割合ヲ以テ給ス

○第六章 營繕

○第壹款 官舎營繕

○第壹節 廳舎其外營繕廉増々費ノ事

第千四百六十 明治八年九月廿八日內務省乙第百貳拾六號府達
 廳舎其外營繕ノ備仕豫目論見ヲ以同濟着手中廉増摸樣替等致シ落成ノ上同外増費下渡ノ儀申出候向モ往々有之不都合ニ付自今許可ヲ經サル費途ハ些少タリトモ一切不相成候條兼テ

相心得可申此旨相達候事

○第貳節 官舎建築費官民費區分

第千四百六十一 明治十年一月廿九日第拾六號使府達
 從前地方廳費及ヒ官舎建築修繕費等其管内ノ民費ニ賦課シ來候處自今官費ト相定候條此旨相達候事

十三年内乙第
二十一號達
(千百九)參看

○第三節 官廳其外修繕費額及下渡方

第千四百六十二 明治十年八月三日內務省乙第拾七號府達
 官舎建築修繕費等官費ト相定候旨明治十年一月第拾六號ヲ以テ相達置候處警察署分署建築修繕費ハ本年七月以後國庫下渡金ト地方稅ト連帶支辨スヘキ儀ト心得ヘシ此旨更ニ相達候事

第千四百六十三 明治十年十月廿五日內務省乙第拾八號府達
 官費ニ關スル官舎等修繕入費ノ儀ハ一廉金五百圓以下各廳限施行シ追テ出來形精算帳可差出旨辛未十二月中公達ノ通相心得從前民費ニシテ本年七月以後官費ト被相定候廉トイヘヒ右同様可取計此旨相達候事

但官國幣社御陵墓營繕ハ此限ニアラス且急ヲ要セサル倉庫修繕ハ其都度可伺出事

第千四百六十四 明治十年十月廿五日內務省乙第拾八號府達
 本年當省乙第拾七號ヲ以相達候官廳其外修繕金一廉五百圓以下各廳限リ處分候費額當分毎

十三年内乙第